自序

心を慰めを要する苦痛あるのみならず、身を艱難の道に置くべき平易安逸の世を渡る人として、神聖なる心靈上の記事を見ることの唯人物批評又は文字解剖の材料を探るのみを至少の利益とせも此書より得ることなるべし。

然れども信仰と人情とを於ける兄弟姉妹として、記者共に心靈の奥殿に於て靈なる神と交はり、悲哀に沈む人靈と同情推察の交換を爲さんとするものは、此書より多少の利益を得る事ならんと信ぜ。

此書ハ著者の自傳ニあらざ、著者は苦しめる基督信徒を代表し、身を不幸の極点に置き、基督教の原理を以て自ら慰さめん事を勉めたるなり。

書中引用せる歐文ハ必要を認むるものゝみして原意を害なハざして翻譯し得るものハ著者の意譯を附せり、然れども譯し得ざるもの又ハ譯するの必要なきもの ハ其儘ニ存し置けり、故ニ歐文を解し得る人と雖も此書を讀むニ於て少しも不利益を感ぜざる事と信ぜ。

明治二十六年一月廿八日

攝津中津川の邊ニ於て　内村鑑三

目次

第一章　愛するものゝ失せし時
第二章　國人に捨てられし時
第三章　基督教會に捨てられし時
第四章　事業に失敗せし時
第五章　貧に迫りし時
第六章　不治の病に罹りし時

特18
162

基督信徒の慰

内村鑑三著

第一章　愛するもの、失せし時

我れ死に就てハ先ず理學より學べり、之を詩人の哀歌に讀めり、之を傳記者の記錄に見たり、時にハ死躰を動物學實驗室に解剖し、生死の理由を研究せり、時にハ死と死後の有樣に就て高壇より公衆に向て余の思想を演べたり、人の死するを聞くや、或ハ聖經の章句を引用し、或ハ英雄の死に際する時の狀を語て、死者を悲む者を慰めんとし、若し余の言に依て氣力を回復せざるものある時ハ余ハ心竊かに其人の信仰薄きを歎じ理解の鈍きを責たり、余ハ知れり死ハ生を有するもの、避くべからざる事にして、生物界連續の必要あるを、

且つ思へらく古昔の英雄或は勇み或い感謝しつゝ世を去れり、余も何ぞ均しく爲し能いざらんやと、殊よ宗教の助あり、復活の望あり、若し余の愛するものゝ死する時にい余い其枕邊に立ち、讃美の歌を唱へ、聖書を朗讀し、曾て彼をしてその父母の安否を問いんが爲め一時鄉里に歸省せしむる時讃美と祈禱とを以て彼の旅出を送りし時、曾時の離別も苦しけれ共又遭ふ時の悅を樂み、涙を隱し愁懼を包み、潔よく彼の門出を送りし如く彼の遠逝を送らんのみと。

嗚呼余い死の學理を知り、又心靈上其價値を了れり、然れ共其深さ、痛さ、悲さ、苦さい其寒冷ある手が余の愛するもの、身に來り、余の連夜熱血を灌ぎて捧げし祈禱をも省みず、余の全心全力を擲ち余の命を捨てゝも彼を救いんとする誠心をも省みず、無慙よも無慈悲にも余の生命より貫きものを余の手よりモギ取り去りし時始めて豫

察するを得たり。

生命い愛あれば愛するものゝ失せしい余自身の失せしあり、此完全最美ある造化、其幾回となく余の心をして絶大無限の思想界に逍遙せしめし千万の不滅燈を以て照されたる蒼穹も、其春來る毎に余よ永遠希望の雅歌を歌ひくれし比翼を有する森林の親友も、其菊花香しき頃嬋々として千秋に聳へ常に余に愛國の情を喚起せし芙蓉の山も、余が愛するものゝ失せてより、星い光を失て夜暗く、鶯い哀歌を彈じて心を傷ましむ、富嶽も今い余のものゝならで、曾て異鄉に在りし時、モナドナックの倒扇形を見、コトパキシの高きを望みし時、我故鄉ならざりしが故にその美と嚴とい反て孤獨悲哀の情を喚起せし如く、此世い今い異鄉と變じ、余い尙ほ今世の人あれ共已に此世に屬せざるものとなれり。

愛せしもの、死せしより來る苦痛ハ僅かに此世を失ふひしに止まらざりしなり、此世ハ何時か去るべきものなれバ今之を失ふも三十年の後に失ふも大差なかるべし、然れ共余の誠心の貫かざるより、余の滿腔の願として溢出せし祈禱の聽かれざるより人間の眼より評す。

(ハ)余ハ懷疑の惡鬼に襲ハれ、信仰の立つべき土臺を失ひ、之を地に求めて得ず、之を空に探て當らず、無限の空間余の身も心も置くべき處なきに至れり。之ぞ眞實の無限地獄よして永遠の刑罰とハ是事を云ふならんと思へり、余ハ基督教を信せしを悔ひたり、若し余に愛ある神てう思想なかりせバ此苦痛ハなかりしものを、余ハ人間と生れしを歎せり、若し愛情てうもの、余に存せざりしならば余に此落膽あかりしものを、嗚呼如何して此傷を愈すを得んや。

醫師余の容体を見て奮興劑と催眠藥とを勸む、然れ共何物か傷める

心を治せんや、友人ハ轉地と旅行とを勸む、然れ共山川今ハ余の敵なり、哲理的の冷眼を以て死を學び思考を轉せんとするも得ず、牧師の慰言も親友の勸告も今ハ怨恨を起すのみにして、余ハ荒熊の如くなり「愛するものを余に歸せよ」と云ふより外ハなきに至れり。

嗚呼余を醫する藥ハなきや、宇宙間余を復活せしむる力ハ存せざる乎、萬物悉く希望あり、余のみ失望を以て終るべき乎。

時に聲あり胸中に聞ゆ、細くして殆ど區別し難し、尙ほ能く聞かんと欲して心を沈むれば其聲あし、然れ共惡靈懷疑と失望とを以て余を挫かんとする時其聲又聞ゆ、曰く「生ハ死より强し、生ハ無生の土と空氣とを變ず、アマゾンの森となすが如く、生ハ無靈の動物体を取り汝の愛せし眞實と貞操の現象となせし如く、生ハ人より天使を造るものなり、汝の信仰と學術とハ未だ斯に達せざるか、此地球が未

た他の惑星と共に星雲として存せし時、又ハ凝結少しく度を進め一つの溶解球たりし時、是ぞ億万年の後シャロンの薔薇を生じレバノンの常盤樹を繁茂せしむる神の樂園とならんとハ誰か量り知るを得しや。最始の博物學者ハ蛤蟆の變じて蛹と成りしときハ生虫の死せしと思ひしならん、他日美翼を翻へし日光に逍遙する蛾ハ曾て地上に匍匐せし見悪くかりしものかりとハ信ずる事の難かりしならん。暗黑時代より信仰自由と代議政体生れ、三十年戰爭の劇場として殆ど砂漠と成りし獨逸こそ今ハ中央歐羅巴の最强國となりしよあらずや、地球と人類が年を越ゆる程生ハ死に勝ちつゝあるにあらずや、然らバ望と德とを有し神と人とに事へんと己を忘れし汝の愛するものが今は死体となりしとて何ぞ失望すべけんや、理學も歴史も哲學も皆希望を說教しつゝあるに何ぞ汝獨り失望教を信ずるや。

"Life mocks the idle hate
Of his arch-enemy Death,—yea sits himself
Upon the tyrant's throne, the sepulchre,
And of the triumphs of his ghostly foe
Makes his own nourishment."—Bryant.

然り余ハ信ず余の救主ハ死より復活し玉ひしを、義人を殺して其人死せりと信せし猶太人の淺猿さよ、何ぞヒマラヤ山を敲ひて山崩れしと信ぜざる、余が愛するものは死せざりしなり、自然ハ自己の造化を捨てず、神ハ己の造りしものを輕ずべけんや、彼の躰ハ朽しおらん、彼の死体を包みし麻の衣ハ土と化せしならん、然れども彼の心、彼の愛、彼の勇、彼の節——嗚呼若し是等も肉と共ま消ゆるおらバ、万有ハ我等に誤認を說き、聖人ハ世を欺けり、余ハ如何にして如何なる体を以て如何なる處に再び彼を見るやを知らず、唯

"Love does dream; Faith does trust
Somehow, somewhere meet we must."—Whittier.

然れども彼の死せざるものにして余の何時か彼と相會する事を得ると雖ども彼の死の余に取ての最大不幸なりしよ相違なし、神若し神なれば何故に余の祈禱を聽かざりしや、神の自然の法則に勝つ能の ざるか、或の祈禱の無益なるものなるか、或の余の祈禱に熱心足らざりしか、或の余の罪深きが故よ聞かれざりしか、或の余を罰せんが爲めに此不幸を余に降だせしか、是れ余の聞かんと欲せし所なり。細き聲又曰く、「自然の法則との神の意なり、雷の彼の聲にして嵐の彼の口笛なり、然り、死も亦彼の天使よして彼が彼の愛するものを彼の膝下よ呼びんとする時遣し賜ふ救使なり」と。嗚呼誰か神意と自然の法則とを區別し得るものあらんや、神若し余

の愛するものを活かさんと欲せば自然の法則に由て活かせしのみ、余輩神を信ずるものの之に依て神に謝す、然れども神を信ぜざるものは或の之を醫藥の効に歸し、或の衛生の力に歸し、治癒の元なる神を讃美せざるなり、神の何たるを知り、自然の法則の何たるやを知れば「神の自然に負けたり」との言の決して出づべきものよあらず。然らば祈る何の要かある、神の祈禱よ應ぜて雨を賜のず、又聖者の祈禱に反して種々の難苦を下せり、祈らずして神命よ從ふに若かず、祈禱の要の何處にあるや。

是難問なり、余の余の愛するもの、失せしより數月間祈禱を廢したり、祈禱おしまの箸を取らじ、祈禱おしよの枕よ就かじと堅く誓ひし余さへも今の神なき人となり、恨を以て膳に向ひ、涙を以て寢所よ就き、祈らぬ人となるよ至れり。

嗚呼神よ恕し賜へ、爾ハ爾の子供を傷けたり、彼ハ痛の故に爾に近づく事能ハざりしなり、爾ハ彼が祈らざる故に彼を捨てざりしなり、否な、彼が祈りし時よ勝りて爾ハ彼を惠みたり、彼祈り得る時ハ爾の特別の惠と慰とを要せず、彼祈り能ハざる時彼は爾の擁護を要する最も切なり、余ハ慈母がその子の病める時に言語に禮を失し易く、小言がましき時に當て慈愛の情の平常に勝り病子を看護するを見たり、爾無限の慈母も余の痛める時に余を愛する余が平常無事の時の比にあらざるなり、余の愛するものの失して後、余が宇宙の漂流者となりし時、其時こそ爾が爾の無限の愛を余に示し得る時にして、余が爾を捨んとする時爾ハ余の迹を逐ひ余をして爾を離れ得ざらしむ。然り祈禱ハ無益あらざりしなり、十數年間一日の如く朝も夕も爾に祈りつゝ、ありしが故に今日此思ハざるの喜と慰とを爾より受くるを

得るなり。

嗚呼父よ、余ハ爾に感謝す、爾ハ余の祈りを聽賜へり、汝曾て余を教へて曰く、肉の爲めに祈る勿れ靈の爲めに祈れよと、而して余ハ余の愛するものと共ま爾に祈るま此世の幸福を以てせざりしなり、若しその爲めに祈りし時ハ必ず「若し御意に叶ハバ」の語を付せり、自己の願事を聽かバ信じ、聽ずバ恨むハ之れ偶像ま願を掛けるもの、爲す所にして、基督信者の爲すべき事ま あらざるなり、嗚呼余は祈禱を廢すべけんや、余ハ今夕より以前に勝る熱心を以て同じ祈禱を爾ま捧ぐべし。

時ま悪靈余に告て曰く、「汝祈禱の熱心を以て不治の病者を救ひし例を知らざるか、汝の祈禱の聽かれざりしハ汝の熱心足らざりしが故なり」と、若し然らバ余の愛するものハ死せしハ余の熱心の足らざり

しが故か、然らば彼を死に至らしめし罪ハ余にあり、余ハ實に余の愛せしものを殺せしものなり、若し熱心が病者を救ひ得ば其熱心を有せざる人こそ憐むべきかな、余ハ余の信仰の足らざるを知る、然れ共余ハ余の熱心のあらん限り祈りたり、而して聽かれざりしなり、若し尙は余の熱心の足らざるを以て余を責むるものあらば、余ハ余の運命に安ずるより他に途なきなり。

嗚呼神よ、爾ハ我等の有せざるものを請求せざるなり、余ハ余の有する丈けの熱心を以て祈れり、而して爾ハ余の愛するものを取去れり、父よ、余ハ信ず、我等の願ふ事を聽かれしに依て爾を信ずるハ易し、聽かれざるに依て尙は一層爾に近づくハ難し、後者ハ前者に勝りて爾より特別の恩惠を受けしものなるを、若し我の熱心にして爾の聽かざるが故に挫けむものならば爾必ず我の祈禱を聽かれしか

らん。

嗚呼感謝す、嗚呼感謝す爾ハ余の此大試錬に堪ゆべきを知りたれば、こそ余の願を聽賜ハざりしなり、余の熱心の足らざるが故に、あらずして反て余の熱心(爾の惠に因て得たる)の足るが故に此苦痛ありしなり、嗚呼余ハ幸福なるものならずや。

愛なる父よ、余ハ信ず爾ハ我等を罰せん爲めに艱難を下し賜ハざる事を、罰ある語ハ爾の如何なるものの、字典に存すべき語にあらざるあり、罰ハ法律上の語にして基督教ふ律以上の範圍に於て要もなき意味もなき名詞あり、若し强て此語を存せんとならば「暗く見ゆる神の惠」なる定義を附して存すべきなり、刑罰なる語を以て爾に愛せらるゝものを屢々威嚇する爾の教役者をして再び爾の聖書を探らしめ、彼等の誤謬を改めしめよ。

然れども余は一事忍ぶべからざるあり、彼何故に不幸にして短命なりしや、彼の如き純白なる心靈を有しながら、彼の如く全く自己を忘れて彼の愛するものゝ爲めに盡しながら、彼に一日も心痛なきの日なく、此世に眼開てより眼を閉しまで、不幸艱難打續き、而して後彼自身に非常の苦痛を以て終れり、此解すべからざる事實の中に如何なる深意の存するや余は知らんと欲するなり。

聖書に云へるごとく地に神を敬するものゝ爲に造られたりと(約百十五章十九節)。然るに此最も神を慕ひしものに最少き此世を樂んで去れり、

ブラジル國の砂中に埋もる大金剛石に誰の爲めに造られしや、無辜を虐げ眞理を蔑視する女帝女王の頭を飾る爲めにか、或に安逸以て貴重なる生命を消費し、春に花に秋に月に此の神聖なる神の職工場(God's Task-garden)を以て一つの遊戯場と見做す懶惰男女の指頭と襟と

に光澤を加へむ爲にか、東台の櫻、龜井戸の藤に黄土の爲めに身を汚し天使の形に惡鬼の靈を注入せし妖怪物の特有なるか、誰が爲めに富嶽の年々壯嚴なる白冠を戴くや、誰が爲めに富士川の銀線に其麓を縫ふや、最も清きもの最も愛すべきものに朝より夕まで、月滿てより月缺るまで、彼の視線に一小屋の壁に限られ、聽くべきものとて彼の援助を乞ふ痛めるもの、聲あるのみ、嗚呼造化は此最良最美の地球を惡魔と其子供に讓與せしか。

此深遠なる疑問に對し答ふる所二個あるのみ、即ち神あるものに存在せざるなり、此地球に勝る世界の義人の爲めに備へらるゝあり。

而して若し神なしとせば眞理なし、眞理なしとせば宇宙を支ゆる法則なし、法則なしとせば我も宇宙も存在すべきの理なし、故に我自身の存在する限りに、此天此地の我目前に存する限りに、余に神な

しと信ずる能わず、故よ理論わ余をして不得止未來存在を信せざるを得ざらしむ、若し神わブラジルの金剛石、ボゴタの青玉、オフルの金を以て懶惰貪慾不義をも粧ひ玉ふなれば、勤勉無私貞節を飾る其石其金わ如何なるものぞ、コーイノル、オル・ロー(共に大金剛石の名)の寶石を以て冠を編み、ペルシヤの眞珠千百を以て襟飾となし、ウラルの白銀、オルマッヅの金を打て腕輪となして彼を飾るも神わ尚ほ足らずとなし、別よ我等の知らざる結晶体を造り、金よ優る鑛物を製し、彼を粧ひつゝあるならん、然り此地わ美にして其富わ大なり、然れ共佞人も之を手よするを得べきものなれば決して無窮の價値を有するものにあらず、我の欲する所のものわ惡人の得る能わざるもの、樂しみ得ざるものなり、義人の粧飾は「髮を辮金を掛また衣るが如き外面の粧飾に非ず、たゞ心の内の隱たる人すなわち壞る

ことあき柔和恬靜なる靈」なり。

余わ了解せり宇宙の此隱語を、此美麗なる造化わ我等が之を得ん爲めよ造られしにあらずして、之を捨てんが爲めに造られしなり、否な、人若し之を得んと欲せば先づ之を捨てざるべからず(馬太傳十六廿五節)誠よ實よ此世わ試錬の場所なり、我等意志の深底より世と世の總を捨去て後始めて我等の心靈も獨立し世も我等のものとなるなり、死て活き、捨て得る、基督教の「パラドックス」(逆說)とわ此事を云ふなり、余の愛するものわ生涯の目的を達せしものなり、彼の宇宙わ少なりし、然れども其小宇宙わ彼を靈化し、彼を最大宇宙よ導くの階段となれり、然り神わ此地を神を敬するもの、爲めよ造り玉へり。

余わ余の失ひしものを思ふ毎よ余をして常よ斷腸後悔殆ど堪ゆる能わざるあり、彼が世よ存せし間余わ彼の愛に慣れ、時よわ不興を以

て彼の微笑に報い、彼の眞意を解せずして彼の余に對する苦慮を增加し、時に彼を呵嘖し、甚しきに至りて彼の病中余の援助を乞ふに當て——假令數月間の看護の爲めに余の身も精神も疲れたるにもせよ——荒らかある言語を以て之に應せざりし事ありたり、彼は渾て柔和に渾て忠實なるゐ我に幾度か嚴酷にして不實ありしや、之を思へば余に地に耻ぢ天に耻ぢ、報ゆべきの彼に失せ、免を乞ふの人に無く、余に悔ひ能はざるの後悔に困められ、無限地獄の火の中に我身で我身を責め立てたり。

一日余に彼の墓に至り、塵を拂ひ花を手向け、最高きものに祈らんとするや、細き聲あり——天よりの聲か彼の聲か余に知らず——余に語て曰く「汝何故に、汝の愛するもの、爲めに泣くや、汝尙は彼に報ゆるの時をも機をも有せり、彼の汝に盡せしは汝より報を得んが爲めに

あらず、汝をして內に顧みざらしめ汝の全心全力を以て汝の神と國とに盡さしめんが爲めなり、汝若し我に報ひんとおらば此國此民に事へよ、渠の家おく路頭に迷ふ老婦に我なり、我に盡さんと欲せば彼女に盡せ、渠の貧に迫められて身を耻辱の中に沈むる可憐の少女に我なり、我に報ひんとならば彼女を救へ、渠の我の如く早く父母に別れ憂苦賴るべきなき兒女に我あり、汝彼女を慰むるに我を慰むるあり、汝の悲歎後悔に無益あり、早く汝の家に皈り、心思を磨き信仰に進み、愛と善との業を爲し、壓の王國に來る時に夥多の勝利の分捕物を以て我主と我とを悅ばせよ」と。

嗚呼如何なる聲ぞ、曾てパマカスなる人が妻ポーリナを失ひし時、聖ジエローム|が彼を慰めん爲めに「他の良人に彼等の妻の墓を飾るに菫菜草と薔薇花とを以てするおれど我がパマカスにポーリナの聖な

る遺骨を濕すに慈善の香乳を以てすべし」と書送りしは蓋し余が余の愛するもの、墓に於て心に聞きし聲と均しきものならん、よし今日より〻以前に勝る愛心を以て世の憐むべきものを助けん、余の愛するもの〻肉身よ於ても失せざりしなり、余〻尙は彼を看護し彼に報得べきなり、斯國斯民〻余の愛するもの、爲めよ余に取て〻一層愛すべきものとなれり。

一婦人の爲めに心思を奪れ殘餘の生を無益の悲哀の中よ送る〻情〻情なるべけれ共是眞正の勇氣にあらず、基督教〻情性を過敏ならしむるが故に悲哀を感せしむる亦從て强し、然れ共眞理〻過敏の情性を鍊り無限の苦痛の中より無限の勇氣を生ずるものなり、アナ、バセルトシ婦の死〻宣教師ジヤドソンをして益々猛勇忠實ならしめたり、メリー、モフハト婦の死〻探檢家リビングストンをして暗黑大陸に進入する事益々深からしめたり。詩人シルレルの所謂

Der starke ist machtigston allein,

(勇者〻獨り立つ時最も强し)

の言〻蓋し此意に外ならじ、若し愛なる神の在まして勇者を一層勇ならしめんとならば其愛するものをモギ取るに勝れる法〻あかるべし。

余〻余の愛するもの、失せしよ因て國も宇宙も一時よ〻殆ど神をも失ひたり、然れ共再び之を回復するや、國〻一層愛を增し、宇宙〻一層美と壯宏とを加へ、神よ〻一層近きを覺へたり、余の愛するもの、肉体〻失せて彼の心は余の心と合せり、何ぞ思きや眞正の配合は却て彼が失せし後よありしと〻。然り余〻萬を得て一つを失〻す、神も存せり、彼も存せり、國も存

せり、自然も存せり、万有の余に取りて彼の失せしが故よ改造せられたり。

余の得し所之に止まらず、余の天國と縁を結べり、余の天國てふ親戚を得たり、余も亦何日か此涙の里を去り、余の勤務を終へて後永き眠よ就かむ時、余の無知の異郷よ赴くよあらざれば、彼が曾て此世よ存せし時彼よ會して余の勞苦を語り終日の疲勞を忘れむと、業務も其苦と辛とを失ひ、喜悦を以て家よ急ぎし如く、殘餘の此世の戰ひも相見む時を樂みよ能く戰ひ終へし後心嘻しく逝かむのみ。

第二章　國人よ捨てられし時

愛國の人性の至誠あり、我の父母妻子を愛する强ひられて之を爲すよあらず、愛せざるを得ざればあり、普通の感能を供へしものよして誰か己に生を與へし國土を愛せざるものあらんや、鳥獸且つ其棲家を認む況んや人よ於てをや、曾てユダヤの愛國者がバビロン河の邊りに坐し、故國のシオンを思ひいでて、涙を流して彈じて曰く、

エルサレムよ、もし我汝をわすれなば、
わが右の手よその巧をわすれしめたまへ、
もし我汝をおもひいでず、
もし我エルサレムをわがすべての歡喜の極となさずば、
わが舌を腭よつかしめたまへ、

と、是れ愛國あり、他よあるなし、此の眞情ハ我が靈よ附着するもの、否な、靈の一部分にして、外より學び得たるものよあらざるなり、

（詩篇第百三十七篇）

「如何よして愛國心を養成すべきや」とハ余輩が暫々耳よする問題なり、曰く國民的の文學を敎ゆべしと、曰く國歌を唱へしむべしと、然れども人若し普通の發達を爲せバ彼に心情の發達するが如く、彼の躰軀の成長するが如く、愛國心も自然よ發達すべきものあり、義務として愛國を呼稱するの國民ハ愛國心を失ひつゝある國民なり、孝を稱する子ハ孝子よあらざるなり、愛國の空言喧しくして愛國の實跡を絶つよ至る、余ハ國を愛する人となりて、愛國を論ずるものといらざらんことを望むものなり。

故に余ハ余の日本國を愛すと云ふハ是決して余の德を賞讃するよあらずして一人並の人間として余の眞情を表するあり、余ハ米國が日本よ勝りて富を有し技藝の盛なるを知る、然れ共余ハ富と技藝との故を以て余が日本よ與へし愛心を米國よ與ふる能ハざるなり、英國の政治、伊國の美術、獨逸の學術、佛蘭西の法律は余をして日本人たるを嫌惡せしめし事ハ未だ曾てあらざるなり、コトバキシの高きハ芙蓉の高きに勝ると雖も後者が余の胸中よ喚起する感情の百分の一だも余ハ前者の爲よ發する能ハざるなり、否な、コトバキシを見て却て芙蓉を思ひ、ミシシピを渡て石狩利根を想ふ、是眞情なり、決して余一人の感覺よあらず、普通一人並の大和男子よして此感なきものハ一人もあるべからざるなり。

然れ共若し愛國も眞情あれバ眞理と眞理の神を愛するも亦眞情なり、

而して完全なる社會ゝ於てゝ二者決して齟齬すべきものゝあらず、國の爲めに神を愛し神の爲めに國を愛し、國民擧て神聖なる愛國者となるべきなり、如斯社會に於て人若し國ゝ捨てられしあらば即ち神に捨てられしなり、其時てそ實ゝ人民の聲ゝ神の聲ゝして、(Vox populi est vox dei)、國ゝ捨てられしとて天にも地にも訴べき人も神も存せざるなり。

然れども世にゝ眞正の愛國者ゝして國人ゝ捨てられしもの其人ゝ乏しからず、耶蘇基督其一なり、ソクラトス其二なり、シピオ、アフリカナス其三なり、ダンテ、アリギエーリ其四なり、而して公平なる歴史家が判決を下すゝ當て、是等人士の場合に於てゝ罪を國民に歸して捨てられしもの、無罪を宣告せり。

余ゝ現在の此余自身を以て不完全なるものと認むると同時ゝ亦今日の社會を以て完全なるものと認むる能ゝざるなり、而して余の國人ゝ捨てられし、罪或は余ゝあらん、余の不注意なりし其一なり、余の過劇なりしゝ其二ならん、余の心中名譽心の尙ほ未だ跡を絶たざるあり、慾心も時ゝ威を逞ふするあり、余の此不幸ゝ陷りしゝ或は是等の爲めならむ乎……

ア、今之を謂て何をかせん、斯く記するさへも余が陰然と余自身を辨護しつゝありと余の愚を笑ふものもあらん、今ゝ余の口を閉づべき時なり、而して感謝すべきゝ余ゝ默止し居るを得べけれゝなり、勿論普通の情として忍ぶべきゝあらざるなり、余ゝ余の國人を後楯とおし力めて友を外國人ゝ求めざりき、余ゝ日本狂と稱せられて却て大ゝ喜悅せり、然るに今や此頼みゝ頼みし國人に捨てられて、余は飯るゝ故山なく、霑むるに朋友なきゝ至れり、如斯ありしと知り

しならば友を外國に需め置きしものを、如斯ありしと知りしならば余の國を高めんが爲めよ強く外國を識らざりしものを、余の位置は可憐の婦女子がその頼みに頼みし良人に貞操を立てむが爲め頻りよ良人を頌揚たる後或る差少の誤解より此最愛の良人よ離縁されし時の如く、天の下に身を隠すに家なく、他人に顔を會し得ず、孤獨淋しさ言へん方なきに至れり。

此時に當て嗚呼神よ、爾の余の隱家となれり、余よ枕する場所なきに至て余の爾の懷に入れり、地よ足の立つべき處なきに至て我全心の天よ逍遙するに至れり、周圍の暗黑は天体を窺ふに當て必要なるが如く、三階の天に登り、永遠の慈悲よ接せんと欲せば、下界の交際より遮斷さるゝよ若かず、國人の余を捨て余の靈界に受けられたり。

斯土の善美の今日迄余の眼を晴ませり、如何よして其富源を開かん乎、如何なる國民教育の方針を取らん乎、如何なる政略を以て海外よ當らん乎、其世界に負ふ義務と天職との如何、ペリクリス時代の雅典、メヂチのフロレンス、エリザベス女王の英國、フレデリック大王の普魯土の交々余の眼に浮び、我國をして之よ爲さんか彼よ爲さんかと、寐ても醒もて余の思想の斯國土より離れざりしあり、眞よや古昔のギリシヤ人の現世を以て最上の樂園と信じ、彼等の思想の現世外よ出して實よ希れなりしとの、余も余の國を以て滿足し、此世よ勝る世界とての詩人の夢想よ讀みしかど、又牧師の説教よ聞きしかど、余が心中よの實在せざりしなり。

余の國人よ捨てられしよりの然らず、余の實業論の何の用かある、誰か奸賊の富國策を聽かむや、余の教育上の主義並に經驗の何かあ

る、誰か子弟を不忠の臣に委ぬるものあらんや、余は斯土に在て斯土のものにあらず、斯土に關する余の意見に地中に埋沒せられて、余は目もあき口もなき無用人間となりたり。

地に屬するものが余の眼より隱されし時始めて天のものが見へ始まりぬ、人生終局の目的とは如何、罪人に罪を洗去るの途あるや、如何にして純淸に達しべきか、是等の問題に今に余の全心を奪ひ去れり、而して眼を擧て天上を望めば、榮光の王は神の右に坐するありて、ソクラット、保羅、コロンウェルの輩數知れぬ程御位の周圍に坐するあり、荆棘の冠を頂きながら十字に登りし耶蘇基督、未來を論じつゝ矢鳩答毒を飲みしソクラット、異鄕ヲベナに放逐されしダンテ、其他夥多の英靈に今に余の親友となり、詩人リヒテルと共に天の使に導びかれつゝ、球より球まで、星より星まで、心靈界の廣

大を探り、此地に決して咲かざる花、此土に未だ見ざる玉、聞かざる音樂、味はざる香味、余に實に思ひぬ國に入りたりけり。

實に此經驗に余に取ては世界文學の註解書とおもれり、エレミヤの慨歌に今に註解書に依らずして明白に了知するを得たり、放逐の作と見做してのみデイビナ、コメヂヤに解し得るなり、殊に基督彼自身の言行錄に國人に捨てられざるもの、如何で其廣其深を探り得べけむや、然り余に余の國人に捨てられてより世界人(Weltman)と成りたり、曾てポリヨーク山頂に於て宇宙學者ハムボルトが自筆にて名を記せるを見たり、曰く、

Alexander, von Humboldt,
In. Deutschland geboren,
Ein Burger der Welt.

獨逸國に生れたる世界の市民、

アレキサンデル、フポン、ハムボルト

嗚呼余も今の世界の市民なり、生を斯土に得しにより、斯土の外に國なしと思ひし陜隘なる思想の、今の全く消失せて、小さきながらも世界の市民、宇宙の人と成るを得しの、余の國人よ捨てられしめで度結果の一にぞある。

然らば宇宙人となりしに由り余の國を忘れしか、嗚呼神よ、若しわれ日本國を忘れなば、わが右の手よその巧みを忘れしめよ、若し子たるものがその母を忘れ得るなれば余の余の國を忘れ得るなり、無理に離縁狀を渡されし婦は益々其夫を慕ふが如く、捨てられし後の國を慕ふの益々切なり、朝の送るよ良人なく、夕の向ふるに戀人なく、今の孤獨の身となりて、齊ふべきの家もなく、閑暇勝にて余所事よ心を使ひ得るよもせよ、朝なよ他の女子が其良人を勞るを見て、我獨り舊時の快を忘るべけんや、嗚呼神よ我が良人をして恙なからしめよ、彼の行路をして安からしめよ、今我の彼よ着き纏ひ心を盡す能のずとも、若し我が祈禱だにして彼を保護するに力あらば、此賤婦の祈禱を受けて彼の歩行を導きたまへ、尚又此身にして彼の爲めに要せらるゝならば何時なりとも爾の御意に委せ彼の爲めに使用し賜へ、此身の爾のものにして爾の爲めに彼に與へしものなり、我に屬せざる此命の彼の爲めよの何時なりとも捧ぐべしと已に爾の前よ誓ひし處なり。

然れども神よ、若し御意ならば我をして再び我夫の家に歸らしめよ、勿論我の爾を捨てゝ我夫よ歸る能のざるなり、是爾に對して罪なるのみならず我夫よ對して不貞なればなり、爾のしろしめす如く我夫よ天地の正氣鍾るあり、その壯宏たる富嶽のごとく、其香しきことと

万朶の櫻の如く、其秀其芳万國興に儔し難し、我如何にして斯夫を欺くべけんや、彼の正氣の時に鬱屈すると雖も、明德再び光を放つ時の、宇宙に存する渾ての善なるもの渾ての美なるものの彼の認むる所となるなり、僞善諂媚の彼の最も嫌惡する所なり、我の彼の威嚴を立てむが爲めに我の真心に從ふざるを得ず、唯願ふ神よ、若し彼は誤解あれば爾の聖靈の力に依て之を氷解せよ、若し彼に迷信の存するあれば爾の光を以て之を排除せよ、而して余再び彼と皈じ、彼再び我と和し、舊時の團欒を回復し、我も彼の一臂となり、彼を旭日の登るが如く、勇者の眠より醒めしが如く、此歴史上厄急の時に當て世界最大國民たるの一助たらしめよ、余の知る誤解の爲めと離別せし夫妻が再び舊の緣と復するや其情愛の濃かなる前日の比とあらざる事を、余も亦此國に入れられ、此國も亦其誤解を認むるに至らば、其時こそ余の國を思ふの情の實に昔日と百倍する時ならん。

嗚呼余の真人を捨てざるべし、孤獨彼を思ふの切なるより余の身も心も消へ行けど此操をば破るまじ、よし余の和解の來る迄此浮世よのあがらへずとも、何時か真人が余の心の深底を悟らむ時もありぬべし、貞婦の心の一念よりして彼の改むる時もやあらむ、最終迄忍ぶものの幸なり、余も余の神の助よて何をか忍び得ざらんや。

第三章　基督教會に捨てられし時

（注意）茲に用ゆる基督教並に基督信者なる語い普通世に稱する教會並に信者を謂ふものにして何れか眞何れか僞い全能なる神のみ知り玉ふなり

人ハ集合する動物あり（Gregarious animal）、單獨ハ彼の性よあらず、白鷺の如く獨り曠野に巣を結び、痛切なる悲聲、聞くものをして戰慄せしむる動物あり、鰯魚の如く大洋中箇々よ棲息し唯寂寥を破らん爲めにか空よ向て飛揚を試むる奇性魚あり、又ハ狸の如く好で日光を避け、古木の下或ハ陰鬱たる岩石の間に小穴を穿ち、生れて、生んで、死する、動物あり、然れども人ハ水産上國家の大富源ある鰊、鱈、鯖魚の如く、南米の糞山を作る海鳥の如く、ロッキー山を攀じ

登る山羊の如く、集合動物にして、古人の言ひし如く單獨を歡ぶ人ハ神よあらざれば野獸なり。

余は斯未信教國に生れ余の父母兄弟國人が嫌惡したる耶蘇教よ入れり、余の始めて此教を聽し頃ハ全國の信徒二千よ滿たず、殊に教會ハ互よ相離れ遠かりけれバ此新來の宗教を信ずるものハ實に寥々寂々たりき、然れども一たびその大道を耳にしてより、これを以て自己を救ひ國を救ふ唯一の道と信じたれバ、社會に嫌惡せらるゝよも關せず、余の親戚の反對するをも意とせず、幾多の舊時の習慣と情實を破りて新宗教に入りし事なれバ、寂漠の情ハ以前に倍せしと共よ全宗教に於ける親愛の情ハ實よ骨肉も啻ならざりき、當時余ハ思へらく基督教會なるものは地上の天國にして其内に猜疑憎惡の少しも存する事なく、未信者社會よ於てハ萬事よ懸念し、心に存せざる

事を云ひ、存する事を云ハざるも、此新社會に於てハ全教會員皆心靈に於ける兄弟姉妹なれバ骨肉よも語り得ぬ事も自由に語るを得、若し余に失策あるとも誰も余の本心を疑ふものハなきもと確信し、其安心喜樂ハ實に筆よも紙にも書き盡されぬ程よありき。

嗚呼なつかしきかな余の生れ生し北地僻郷の教會よ、朝よ夕に信徒相會し、木曜日の夜半の祈禱會、土曜日の山上の集會、日曜終日の談話、祈禱、聖書研究、偶々會員病むものあれバ信徒交々不眠の看護をなし、旅立を送る時、送らるゝ時、祈禱と讃美と聖書とハ我等の口と心とを離れし暇ハ殆どなかりき、偶々外より基督信徒の來るあれバ我等ハ舊友に會せしが如く、敵地よ在て味方よ會せしが如く、打悅びて之を迎へたり、基督信徒にして惡人ありとハ我等の思ハんとするも思ふ事能ハざりき。

然れども此小兒的の感念ハ遠からずして破碎せられたり、余ハ基督教會ハ善人のみの巢窟よあらざるを悟らざるを得ざるよ至れり、余ハ教會内に於ても氣を許すべからざるを知るよ至れり、加之余の最も秘藏の意見も、高潔の思想も、勇壯の行績も、余をして基督教會よ嫌惡せしむるよ至れり。

余ハ基督教の必要なる基本として左の大個條を信せり

主たる爾の神を拜し惟之にのみ事ふべし

（出埃及二十〇三、四、五、申命記十〇二十、馬太傳四〇十）

而して神と眞理とを知る惟一の途としてハ使徒保羅の語よしテルーテルが彼の信仰の城壁と頼みプロテスタント教の基石とありし左の題字を以てせり。

兄弟よ我おんぢらに示す我が曾て爾等に傳へし所の福音ハ人よ

り出づるまあらず、蓋しわれ之を人より受けず亦教へられず、惟イエス、キリストの默示に由て受たれば也

（加拉太書第一章十一、十二）

此等の確信が余の心中に定まりたれば、こそ余は意を決して余の祖先傳來の習慣と宗教とを脱し新宗教に入りしなり、余の心靈の自由を得んが爲に基督教に皈依せり、僧侶神官を捨てしの他種の僧侶輩に束縛せられんが爲めにあらざりしなり。宇宙の神を以て余の父の父と尊み、彼自身よりの默示を以て眞理の標準と信ず、己の一身を處するに於ても、余の國に盡さんとするに於ても、基督教會に對する余の位置に於ても、余の恐く此標準に依て行わん事を勤めたり、然るに余の智能の發達するに從ひ、余の經驗の積むと共に、余の信仰の進むと全時に、余の思想並に行蹟に於て屢々彼の基督教先達者、此の神學博士と意見全く相合するを得ざるに至れり、或わ余の一身を處するに於て忠實なる一信徒より忠告を蒙るあり、曰く、「君の行蹟わ聖典の明白なる教訓に反せり君宜しく改むべし」と、親愛なる友人の忠告として余わ再び三度己を省みたり、然れども沈思默考に加ふるに祈禱と聖典研究の結果を以て而後友人の忠告必しも眞理なりと信ぜざる時わ不得止自己の意志に從ふたり、友人わ余を信ずるを以て敢て余の彼が言に從わざるを恐らず と雖も、余を愛せざる兄弟姉妹(?)の眼よりわ余わ聖典の教訓に逆らひしもの、基督より後戻りせしもの、特種の天惠を放棄せしものと見做さるゝに至れり。

余の神學上の思想に就ても、余の教育上の主義に就ても、余は余の傳道上の方針に就ても、余の教育上の眞理と信ずる所を堅守するが爲めに或

の有名博識なる神學者に遠けられ、或の基督教會一般より非常の人望を有する高德者より無神論者として擯斥せられ、終よの教會全体より危險なる異端論者、聖書を蔑ろする不敬人、ユニテリアン(悪しき意味よて)、ヒクサイト、狂人、名譽の跡を逐ふ野望家、教會の狼、等の名稱を付せられ、余の信仰行蹟を責むるよ止まらずして余の意見も本心も悉く過酷の批評を蒙むるよ至れり。

嗚呼余の大悪人にあらずや、余は人も我も博識と見認めたる神學者よ異端論者と定められたり、余の實に異端論者にあらざるか、余よ先ずる十數年以前より基督教を信じ而も歐米大家の信用を有し全教會の頭梁として仰がる、某高德家は余を無神論者なりと云へり、余の實に無神論者よあらざるか、名を宗教社會に藉かし、印度よ支那よ日本に福音を傳ふる事十數年、而も博士の号二三を有する老練なる某宣教師は余のユニテリアンなりと云へり、余の實に救主の贖罪を信ぜず自己の善行よのみ頼むユニテリアンならざるか、傳道醫師として有力なる某教師の余を狂人なりとの診斷を下せり、余の實よ知覺を失ひしものあるや、教會全体は危險物として余を遠けたり、余の實よ悪鬼の使者として綿羊の皮を蒙りあがら神の教會を荒す爲めよ世よ産出されし有害物なるか、余を悪人視するもの萬人にして辯護するもの己一人あり、萬人の証據と一人の確信と何れが重きや、然らば余の基督信者にはあらざりしなり、余の自己を欺きつゝありしものよして余の眞性の悪鬼なりしなり、何ぞ今日よりの基督信徒たるの名を全く脱し普通世人の世涯に歸らざる、否な、斯よ留らずして余の今日迄基督教の爲めに盡せし心實と熱心とを以て余を敵視する基督教會を攻擊せざる、何ぞ余の敵の神よ祈るを得むや、

何ぞ余の敵の聖書を尊敬し研究するを得むや、余ハユニテリアンなり、無神論者なり、僞善者なり、神の教會ニ屬すべからざるものなり、狂人なり、よし今より後ハユーム、ボーリンブローク、ギボン、インガーソルの輩を學び一刀を基督教の上ニ試みバや。

此時ニ當て余の信仰は實ニ風前の燈火の如くなりし、余ハ信仰墮落の最終点ニ達せんとせり、憤怨は余をして信仰上の自殺を行ハしめんとせり、余の全情ハ今ハ無神論者の上にありき、ヨハン、ズチワート、ミルの死を聞て神ニ感謝せし某監督の無情を怒れり、トマス、ペーンの臨終の狀態を摘要して意氣揚々たる神學者の粗暴を歎せり、嗚呼幾千の無神論者ハ基督教信徒自身の製造に罹るや、余ハ曾て聞けり、無病の人をして清潔なる寐床の上に置き而して彼ハ危險なる病ニ罹れる患者なれバ今ハ病床の上にありと側より絶へず彼ニ告ぐれバ無病健全なる人も直ニ眞正の病人となると、人を神より遠からしめ神の教會を攻撃せしむるものハ必しも惡鬼と其子供にあらざるなり。

然れ共神よ、我が救主よ、爾ハ此危險より余を救ひ玉ひたり、人聖書を以て余を責むる時之が防禦ニ足るの武器ハ聖書なり、教會と神學者ハ余を捨つるも余の未だ聖書を捨つる能ハざるハ余ハ未だ爾に捨てられざるの一徵候なり、余ハ爾の下僕ルーテルが我の福音なりとて縋りし加拉太書ニ行かむ、而して彼の平易なる獨逸語を以て著述せし其註解書を讀まん、「今よりのち誰も我を擾す勿れ、蓋ハわれ身ニイエスの印記を佩たれバ也」(六章拾七節)、嗚呼何たる快ぞ、余も不足おがらもイエスの名を世人の前ニ表白せしニあらずや、余も余の罪より逃ん爲めニ「イエス」の十字架ニすがるにあらずや、余の信者

あると不信者なるとは他人の批評如何に由るにあらずして、余はイエスの印記あるとなきとに由る也、「義人は信仰に依て生くべし」(三章十一節)と、然り余ハ今ハ自己の善行に憑らずして十字架上に現れたる神の小羊の贖罪に頼めり、是の信仰こそ余が神の子供たるの証據なり、キリストを十字に附けしものハ悉皆悪人無神論者なりしか、彼の弟子を迫害しながら神に盡くしつゝありしと信ぜしものもありしにあらずや、約百の友ハ彼の不幸艱難を以て彼の悪人たるの証となせり、然れども神ハ彼の三人の友より勝りて約百を愛し賜ひしにあらずや、衆人の誹毀に對し自己の尊厳と獨立とを維持せしむるより於て無比の力を有するものハ聖書なり、聖書は孤獨者の楯、弱者の城壁、誤解人物の休所なり、之れに依てのみ余ハ法王よりも大監督よりも神學博士よりも牧師よりも宣教師よりも抗する事を得るあり、余ハ聖書を

捨てざるべし、他の人ハ彼等より抗せん爲めより聖書を捨て聖書を攻撃せり、余は余の弱きを知れば聖書ある鉄壁の後より隱れ、余を無神者と呼ぶもの、余を狠と稱するものと戰ハんのみ、何ぞ此堅城を彼等に讓り野外防禦なきの地に立て彼等の無情淺薄狹量固執の矢より此身を露すべけんや、

With one voice, O world, though thou deniest,
Stand thou on that side—for on this I am!

時に悪靈余に告て曰く、汝未だ若年、經驗積まず、學修まらず、何ぞ汝の身を先達老練家の指揮に任せざる、自己の言行を以て最良なるものと見做すハ平凡人のなす處にして、汝が他人の言を容れざるハ是れ汝が高慢不遜なるの証あり、汝ハ自己を以て最も才智ある最も學識ある最も經驗あるものと致すや。

余ハ余の無學無智なるを知る、又大監督神學博士の聲名決して輕ずべからざるを知る、然れども余の無學なるが故ニ余ハ余の身も信仰も働も是等高名の人の手ニ任すとあらバ余ハ未だ自己を支配する能はざるものなり、余ニして是と彼とを分別するの力あきならバ余ハ誰ニ由て身を處せんや、見よ彼等余の不遜を責むるものも相互ニ說を異にするニあらずや、監督教會ハ自己の教會を稱して(The Church)と云ひ、一方ニハ羅馬教會の擅行を批難しあがら他方にハ他の新教徒ニ附するニ(Dissenters)分離者とか(Nonconformists)不合者とかの聞き悪き名稱を以てするニ非ずや、余ハ組合派の教師が余が最も信任するメンゼスト派の教師を罵詈するを耳にせり、ユニテリアンハオルソドックスの迷信を笑ひ、後者ハ前者の不遜異端を責むるニあらずや、其他長老派の固執なる、浸禮派の獨尊なる、或ハ「クリスチャン」派とか、

新エルサレム派とか、ブラダレン派とか、各々其特種の教義を揚言し、自派を賞讃して他派を蔑視するニあらず、博識才能あるもの何ぞ一派の特有物ならんや、余にして自己の信仰を定むる能ハざれバ余ハ果して何れの派に己を投ずべきか、カルヴナル、マニングが天主教會の高僧なりしが故ニ余ハ法王の命ニ從ふべきか、監督ヒーバー、ヂーン、スタンレーが英國監督派ありしが故に余は監督教會ニ屬すべきか、ジャトソンが浸禮教會の人なりしが故ニ余ハ「バプチスト」たるべきか、「リビングストン」が長老教會の人なりしが故に余も亦彼と教派を仝ふすべきか、若し人物を以て余の教會上の位置を定むべしとなれバ余ハユニテリアンたるべきなり、何となれバ余の最も尊敬するチャニング、ガリソン、ローエルの如きハユニテリヤン教ニ屬したれバなり、余ハクエークルたるべきなり、何となれバシヨーシ

フホクス、ウヰリヤム、ペン、スチーベン、クレ、ット、ウヰスター、モリスの輩は友會派の人たりしかれば、余の普通基督教徒が目して論ずるに足らざるものと見做す小教派の中よりも顯然たる君子、貞淑の貴婦人を目擊したり、惡魔よ汝の説教を休めよ、若し余よりして善惡を區別し、之を撰び彼を捨つるの力を有せざれば、余の他人の奴隷となるべきものなり、心靈の貴重なるはその自立の性にあり、我最と少きものと雖も苟も全能者と直接の交通を爲し得べきものあり、神の法王監督牧師神學者輩の手を經ずして直接に余を教へ賜ふなり。

嗚呼眞理なる神よ、願くは余をして永久の愛より於て爾と一ならしめよ、余の時々多くの事物に關して讀み且つ聞くに倦めり、余の欲する處望む處は悉く爾より於て存するなり、總ての博士等

をして默せしめよ、萬物は爾の前に靜かならしめよ、而して爾のみ余に語れよ。

トマス、アー、ケムピス

他人の忠告決して輕すべきものにあらず、人は自身の面を見る能はざるが如く社會に於ける己の位置をも能く見る事能はざるべし、一切万事我意を押通さんとするは傲慢頑愚の徵にして我等の宜しく注意すべき事なり。

然れども自己の意見を以て悉く信憑すべからざるものと斷念するも亦弱志病意の徵候なり、茲に博士モヅレーの言を聞け

"It is not partiality to self alone upon which the idea is founded that you see your own cause best. There is an element of reason in this idea; your judgement even appeals to you, that you must grasp most completely yourself what is so near to you, what so intimately relates to you; what by your situation, you have had a power of searching into".—Mozley's Sermon on "War".

人ハ殊更に能くその申分を判別し得べしとの觀念ハ必しも自己ヨ對する偏頗心ヨのみ依るヨあらずして公平なる理由の其中ヨ存するあり、吾人の理達に訴ふるも吾人ハ吾人ヨ接近する、吾人ヨ緻密なる關係を有する、吾人の位置よりして自由に探究し得る事物に就てハ、吾人自ら最も充分ヨ是れを會得し得べきハ明らかなり。

「戰爭」と題する說教中博士モッレーの語

余ハ日本人なり、故に日本國と日本人民ヨ關してハ余ハ英國の碩學よりも、米國の博士よりも完全なる思想を有すべきものヨして、此國と此民とを敎化せんとするヨ於てハ余ハ彼等ヨ勝りて確實なる觀念を有する事ハ當然たるべきなり、余ハアイヌ人の國に到れバ余のアイヌ人ヨ勝る學識を有するの故を以てアイヌ人に關するアイヌ人の思想を輕せざるなり、余ハ小徑を山中ヨ求むる時ハ余の地理天文ヨ達し居るが故ヨ樵夫の指揮を見貶さゝるなり、余の國と國人とに關して余が外國人の說を悉く容れざるハ必しも余の傲慢なるが故にあらざるあり、日本ハ余の生國にして余の全身ハ此國土ヨ擊がる、ものなれバ余の此國ヨ對する感情の他國人ヨ勝るハ當然なり、利害の大關係ある余の自國に關する余の觀念ハ他國人の此國ヨ對する觀念よりも健全にして確實なりと信ずるハ決して自身を賞揚するの甚しきものと云ふべからざるなり、又余の一身の所分ヨ就ても余ハ余自身の事に關しては最大最良ある專門學者なり、神の靈あらでハ神のことを知るものなし、余の靈のみ余のことを知るなり、余の神ヨ對する信仰また然り、余ヨ最も近く且余の最も知り易きものハ神な

り。

God is the only immediate and outward object of the soul—external objects of

sense are but mediately and directly known——Leibnitz

余の神を知るは於てもプロテスタント教徒全体が羅馬法王の取次を要せざるが如く監督又は「ヴヤコ」又の牧師又の執事又は勸士の取次をも要せざるあり。

反對論者曰く、若し君の説の如くならば教會の用何處にか存する、人は一箇人として立つ能のざれば、そ教會の必要あるにあらずやと。

浅薄なる議論あり、視ずや同様なる議論を以て天主教會の千五百年來他の基督教徒を責めつゝあるあり、同様なる議論を以てアリビゼンス教徒の殺戮せられ、セルビタスの燒殺せられたり、教會なるものの神の子供の集合体にして無私公平和愛慈悲の凝結なり、眞正の信徒ありて教會あるなり、教會ありて信徒あるよあらず、信徒の自然に教會を造るものあり、恰も全じ幹より幾汁を吸收じつゝある枝

葉の一植物たるが如し、人の眞理を知るの力を有し、直ち神の「インスピレーション」は接するを得るものなりとは、余が基督教基本の原理と信ずる處なり、眞理の眞理の証なり、教會必しも眞理の証にあらざるなり、教會の眞理を學ぶよ於て善良ある扶助なるべけれ共、眞理の教會外に於ても學び得べきものなり。

"The destruction of the theory of the infallibility of the Bible has been one of the means by which we have been prevented from resting in the external and mechanical, and driven to what terrifies us at first as the intangibility and vagueness of the Spirit."——Rev. J. Llewellyn Davies, in the Fortnightly Review, reprinted in the Library Magazine of March, 1888.

聖書無誤謬説の破壞の我等をして外形的並に器械的の基礎を捨てしめ、手にて觸るゝ能のざるもの、定義を付する能のざるものとして我等の始め恐怖せし靈の土臺に頼らざるを得ざらしむ

るものなり。

リューウエリン、デビス教師の語

教會無説誤説も聖書無誤謬説と同時よ中古時代の陳腐に付せる遺物として二十世期の人心より棄却すべきものなり。

是理論なり、然れ共世の未だ理論の世にのあらざるなり、憎愛の理論的にあらず、人の服從を愛して抵抗を惡むものなり、假令余の理論上確實なるよもせよ余の先輩と説を仝ふせず其指揮よ從のざれば余は其保護の下に置かれざるの決して怪むべきよあらざるなり、余の教會に捨てられたり、余の余の現世の樂園と頼みし教會より勘當せられたり。

嗚呼神よ、此試錬にして余の未だ充分に爾を知らざる時よ來りしならば余の全く爾の手より離れしならん、然れども爾の余に堪ゆ能のざるの試錬を降さず、教會の余が自立し得る時に當て余を捨てたり、

教會我を捨し時に爾の我を取り擧げたり、余の愛するもの去て余の益々爾に近く、國人に捨てられて余の爾の懷にあり、教會に捨てられて余の爾の心を知れり。

教會が余を捨てざりし前の余の教會外の人を見る質に不公平なりき、余の思へらく基督教外よ善人あるなしと、余の未信徒を以て神の子供と稱すべからざるものと思へり、然るよ教會が余を冷遇し、其教師信徒が余の本心さへも疑ふ時、教會外の人にして反て余の眞意を諒察するものあるを見て、余の天父の慈悲の尚は多量に未信徒社會に存するを了れり、又教會外に立て局外よりこれを見る時の今日迄の神意の教導に由て歩む仁人君子の集合躰と思ひしものも亦其内に猜疑、僞善、妄奸の存するおきよあらざるを知れり、尖塔天を指して高く、風琴樂を和して幽なる處のみ神の教會あらざるを知れり、

孝子家計の貧を補へんが爲めに寒夜に物を鬻ぐ處是神の教會ならずや、貞婦瓦人の病を苦慮し東天未だ白まざる前より社壇より願を込むる處是神の教會ならずや、余世の誤解する所となり攻撃四方に起る時友人あり獨り立て余を辯ずる時是神の教會ならずや、嗚呼神の教會を以て白壁又へ赤死の内より存するものと思ひし余の拙なさよ、神の教會へ宇宙の廣きが如く廣く、善人の多きが如く多し、余へ教會に捨てられたり而して余へ宇宙の教會に入會せり。

余へ教會より捨てられて始めて寛容寛宥の美德を了知するを得たり、余が小心翼々神と國とよ事へんとする時より當て、余の神學上の説の異なるより教會へ余の本心と意志とよ疑念を懷き終に或へ余を惡人と見るに至れり。

嗚呼余へ余が佗人をさばきし如くさばかれたり(馬太七章一、二)、余も

教會よりありし間へ余の教會外の人を議するに當てかくありしなり、基督教を信せざるが故に未信者へ皆信用すべからざるものなり、法王より賴むが故より天主教徒へ汚穢なる豕兒(Foul swine,ルーテルの語)なり、魯國宣教師より教化されし希臘教徒へ國賊なり、監督教會へ英國が世界を掠奪せんが爲の機關よりして其信徒へ黄白の爲めより使役せらる、探偵なり、長老教會へ野望人士の集合所なり、メソヂスト教會へ不用人物の巢窟なり、クエークル派へ僞善なり、ユニテリアン派へ偶像教より勝る異端なりと、若し某氏の宗教事業の盛なるを聞けば曰く、彼世人に諂ふが故に彼の教會より聽衆多しと、某氏の學校の隆盛を聞けば曰く彼高貴より媚るが故に成功したりと、余へ思へらく眞正の善人よして余と説を仝ふせざるの理由なしと、天主教徒たり、ユニテリアンたり、メソヂストたり、プレスビテリヤンたり、皆各

々肉慾の充たすべきものあれがてそ然るあれと、然れども教會に捨てられてより余の眼は開き、余の推察の情ハ頓に增加せり、學説を異にしても、本心ハ善人たるを得べしとの大眞理ハ余ハ此時に於て始て學び得たり、眞理ハ余一人の有にあらずして宇宙に存在する凡ての善人の有たる事を知れり、心の奥底より天主教徒たる人を余ハ想像し得るに至れり、充分なる良心の許可を得てユニテリヤンたる事を余は疑ハざるよ至れり、余ハ始めて世界に宗教の多き理由と同宗教内に宗派の多く存在する理由とを解せり、眞理ハ富士山の壯大あるが如く大あり、一方より其全体を見る能ハざるあり、駿河より見る人ハ云ふ富士山の形ハかくありと、甲斐より見る人は云ふかくなりと、相模より見る人ハ云ふかくなりと、駿河の人ハ甲斐の人よ向て汝の富士ハ偽りの富士なりと云ふべけんや、若し自ら甲斐よ行て之を望めバ甲州人の言無理ならざるを知るべし、人間の力なきと眞理の無限無窮なる事とを知る人ハ思想の爲めよ他人を迫害せざるなり、全能の神のみ眞理の全体を會得し得るものなり、他人を議する人ハ自己を神と全視するものよして傲慢てふ惡靈の擒となりしものなり、己れ人に施されんとする事を亦人にも其如く施よ、余ハ無神論者にあらざれど余ハ無神論者視せられたり、余ハユニテリヤンならざるにユニテリヤンとして遠ざけられたり、余を迫害せしものハ余の境遇と教育と遺傳とを知らざるが故に余の思想を解する能ハざして、余が彼等と全説を維持せざるが故に余を異端となし惡人となせり、余は今より後余と説を異にする人を見るに然せざるべし、歐米人が日本人の思想を悉く解し能ハざるが如く日本人も歐米人の思想を全く解すると難かるべし、然り寛容は基督教の美德なり、寛

容ならざるものゝ基督教徒にあらざるなり。

教會に捨てられしものゝ余一人にあらざるなり、

會堂にありしもの是を聞て大ゝ憤り、起てイエスを邑の外に出し投下さんとて、其邑の建ちたる崖にまで曳き往けり。

（路加傳第四章廿八、廿九）

基督ゝ依て眼を開かれしものも教會より放逐せられたり、

彼等答へて曰けるゝ、爾ゝ盡く罪孽に生し者なるゝ反つて我儕を教ふるか、遂に彼を逐出せり、彼等が逐ひ出し、事を聞き、イエス尋ねて之に遇ひいひけるゝ、爾神の子を信ずる乎、答へて曰ひけるゝ主よ彼として我が信ずべき者ゝ誰なるや、イエス曰けるゝ、爾すでゝ彼をみる今なんぢと言者ゝそれなり、主よ

我信ずといひて彼を拜せり

（約翰傳九章、廿四ー廿八）

ルーテルも放逐せられたり、ローシヤ、ウサルリヤムスも放逐せられたり、リビングストンが直接傳道を止めて地理學探檢に從事せしが故に英國傳道會社の宣教師たるを辭せざるを得ざるに至りし如く、又彼の支那ゝ於ける米國宣教師クロセット氏が普通宣教師と異なる方法を採り北京の窮民救助に從事せしに依て、終に本國よりの補給を絶たれ支那海ゝ於て貧困の中ゝ下等船客室内ゝ死せしが如く、或ゝ師父ダミエンが生命を拋つてモロカイ嶋の癩病患者を救助し死して後彼の聲名天下に轟きしや或る米國の宣教師にして神學博士なる某が一書を著して此殉教者生前の名譽を破毀せんとせしが如く、教會に捨てられ信者に譏謗され惡人視せらるゝ決して余のみゝあらざるなり

世にくまるゝ　われのみならず、
イエスゝわれよりも　いたくせめらる、

然れども嗚呼神よ、余ゝ直ゝ全く余を存して曲ゝ悪く余を捨てし教會よりありとゝ斷じて信せざるなり、余に欠点の多きゝ爾のしろしめす如くにして余の言行の不完全なるゝ余の充分爾の前よ白狀する所なり、故に余ゝ余を捨てし教會を恨まざるなり、其内に仁人君子の存するありてその爾の爲めに盡せし功績ゝ決して少々あらざるとは余の充分に識認する所なり、其内に僞善壓制卑陋の多少横行するにもせよ、之れ爾の御名を奉ずる教會なれば我何ぞ之を敵視するを得んや、余の心余の祈禱ゝ常に其上にあるなり、余ゝ世よ「リベラル」寛大」なりと稱する人が自己の如く「リベラル」ならざる人を目して迷信と呼び狹隘と稱して批難するを見たり、願くゝ神よ余に眞正の「リベラル」なる心を與へて余を放逐せし教會をも寛宥するを得せしめよ。

余ゝ無教會となりたり、人の手にて造られし教會今ゝ余ゝ有するなし、余を慰むる讃美の聲あし、余の爲めよ祝福を祈る牧師なし、然らば余ゝ神を拜し神よ近く爲めの禮拜堂を有せざる乎。

彼の西山よ登り、廣原沃野を眼下に望み、俗界の上に立つ事千仞、獨り無限と交通する時、軟風背後の松樹に讃歌を彈じ、頭上の鷲鷹比翼を伸して天上の祝福を垂るゝあり、夕陽已に沒せんとし、東山の紫、西雲の紅、共に流水鏡面に映ずる時、獨り堤上を歩みながら失せにし聖者と靈交を結ぶに際し、ベサイダの岩頭、「サン、マルコ」の高壇、余よ無聲の説教を聽かしむるあり、激涙岸を打て高く、砂礫白泡と共に往來する所、ベスホレンの凱歌、ダムバーの砲聲、共に余の勇氣を鼓舞するあり、然り余ゝ無教會にはあらざるなり。

然れども余も社交的の人間として時よりの人爲の禮拜堂よ集ひ衆と共に神を讃め共に祈るの快を欲せざるよあらず、教會の危險物たる余の起て余の感情を述べ他を勸むるの特權なければ、余の竊かよ坐を會堂の一隅燈光暗き處よ占め、心に衆と共に歌ひ、心よ衆と共よ祈らん、異端の巨魁たる余の公然高壇の上に立ち肅然福音を演べ傳ふるの許可を有せざれば、余の鰥寡孤獨憂に沈むもの、或の貧困縷衣にして人目を憚るもの、或の罪に恥て暗處に神の免を求むるもの、許を問ひ、ナザレの耶蘇の貧と孤獨と惠とを語らん、嗚呼神よ余の教會を去ても爾を去る能のざるなり、教會に捨てらるゝ不幸の不幸なるべけれ共爾よ捨てられざれば足れり、願くの教會に捨てられしの故を以て余をして爾を離れざらしめよ。

第四章　事業に失敗せし時

基督教の人を眞面目よなすものあり、青年之に由て已に老成人の思想あり、少女之に由て已に老媼の注意あり、その基督教の物の實を求めしめてその影を輕せしむるものなれば なり、小説の玩讀芝居の見物の變じて歴史の攻究社會の觀察となり、野望的の高名心の變じて沈着なる事業の計畫となり、自己尊大の念の公益增進の希望と變じ、「如何にして斯國と斯神とよ事へん乎」との問題よ付て日も夜も沈思するに至る。

"When I was yet a child, no childish play
To me was pleasing; all my mind was set
Serious to learn and know, and thence to do
What might be public good; myself I thought
Born to that end."—Milton, Paradise Regained.

宗教にして事業心を喚起せしむるものゝ基督教なり、事業と宗教とゝ自ら其性質を異にするものなりとの觀念ゝ普通人間の抱懷する所なり、事業とゝ活潑なる運動を意味するものゝして、宗教とゝ清肅隱遁を云ふものたるが如し、余輩未だ佛教の熱心家にして教理の爲めに大事業を企てし人あるを聞かず、釋氏の理想上の人物ゝ決して事業家にゝあらざりしなり、然れども基督教の特徴として世の事業、を重ずるのみならず之を信ずるものをして能く大事業家たるの聖望を起さしむ、カーライルの所謂 Peasant-saint (農聖人)、即ち手に鋤を取りながら心に宇宙の大眞理を貯ふる人、是基督の理想的人物にして、基督彼自身も亦僻村ナザレの一小工なりし。

余も基督信徒となりしより芝居も寄席も競馬も弄花も悉く舊來の玩味を去り、獨り事業てふ念ゝ頻に胸中に勃興して殆んど禁ずる能ゝ

ざるに至れり、或ゝ蘇のリビングストンを學び、「利慾の爲めに商人の通過し得る處何ぞ基督の愛に厠まさる、宣教師の通過し得ざるの理あらんや」と云ひつゝ、亞弗利加大陸を横斷せしに倣ひ、我も又新宗教の感動の下に南洋又ゝ北海無人の邦土を探求せんか、或ゝ獨のシコワーツ(Christian Frieudrich Schwartz)を學び、未開國の教導師となり、仁愛の基礎の上に其國是を定めん乎、或ゝ英のウサリヤム、ペンを學び、荒撫を開き蠻民と和し、純然たる君子國を深森廣野の中に建立せん乎、或ゝ米のピーボデーを學び、貧より起て百萬の富を積み、孤を養ひ寡を慰め、大慈善の功績を擧げん乎、休言よ、基督教よ世の快樂おしと、此希望此計畫——嗚呼實よ余ゝ余の生涯の短きを歎せり、事業、事業、國の爲めの事業、神の爲めの事業、——嗚呼世よ快と稱するもの、中何物か此快樂よ勝るものあらんや。

余は曾て思へらく、自己の爲めに富貴たらん事を祈るは罪なり、神必ず如斯祈禱は受け賜はざるべしと、名譽を得んが爲めの祈禱も又然り、然れども他を益せんが爲めに祈る事は神の最も悦び賜ふ所にして、かゝる祈禱は必ず聽かれ、余の事業は必ず成功に至らんと、依て万事を打捨てゝ余の神聖なる希望を充たさん事を勉めたり、勿論基督信徒として余は世に媚び高貴に諂り以て余の目的を達すべきにあらず、余の頼むべきは神あり、正義あり、「或は車を頼み或は馬を頼みとする者あり、されど我等はわが神ヱホバの名をとなへん(詩篇二十〇七)。

此時こそ實に余に取りては最も多望なる最も愉快なる時なりき、余の前途防害なるものなく、余の心中に失敗なる字の存するなし、余は宇宙の神を信じ万人の爲めに大事業を遂げんと欲す、成功必然なり、神在す間は余の事業の成功せざる理由あるなし、見よ世の事業家の失敗するは自利の爲めに計り榮光の神を信ぜざればなり、余は然らず、余の事業は公益の爲め神の爲めなり、若し余にして失敗するならば神は存せざるなり、正理は誤謬なり。、、、、、、、

、、

然るに余の愛する讀者よ余は失敗せり、數年間の企圖と祈禱とは畫餅に屬せり、而して余の失敗より來りし害は余一人の身に止まらずして余の庇保の下にある忠實なる妻勤勉なる母の上にも來れり、余は世間の嘲弄を蒙れり、友人は余の不注意を責め、余の敵は余の不幸を快とせり、惡靈此機に乘じ余に耳語して曰く「汝無智のものよ、

方便の事業成功の秘訣あるを知らざる乎、精神のみを以て事業を爲し遂げ得べしと一つに思ひし稚なる心の憐れさよ、某大事業家を見よ、彼の學校を起すに當て廣く世の贊成を仰ぎ、少々の異心に恥づる所あるとも數万の後進を益する事と思へば意を曲げ膝を屈し以て莫大の資金を募り得しよあらずや、「獅理は常に強大なる軍隊と共にあり」とのナポレオン第一世の語の實に事業家の標語たるべきものなり、見よ某牧師の常に正義公道の利益を說くと雖も、彼自ら會堂を新築し教理を傳播せんとするや必ず世の方法を取るよあらずや、正義公道との天使の國に於ての實際に行はるべけれ共此人間世界に於ての多少の法略と混合するよあらざれば決して行はるべきものにあらず、汝今日より少しく大人氣おれ、眞理だとか愛國だとか云ふ事は好加減にせよ、然らざれば汝自身失敗に失敗を重ぬるのみならず、罪なき汝の妻子父母も汝と共に悲哀の中に一生を送らざるを得ず、且又汝の益せんとする公衆も汝の方法を改むるにあらざれば汝より益を得る事なし、汝何ぞ國の爲め汝の愛する妻子の爲めに忍べざる、神の汝より無理の請求を爲さず、法略の今世の必要物なり、法略と虛言との自ら異る處あり、汝解せしや否や」と。

嗚呼誰か此巧みなる論鋒に敵するものあらんや、事實の確實なる結論者あり、余は經驗に依て正義公道の無功力なるを知れり、惡靈の說論之れ天よりの聲あらずや、我等の經驗に依てのみ事物の眞想を知るを得るなり、而して經驗の余の希望に反せり、過而勿憚改、何ぞ公平なる學者として、勇氣ある男子として、今日迄の迷信を脫し、國の爲め神の爲め少しく法略を利用して前日の失敗を贖へざる。時に聲あり內より聞ゆ、其調子の深遠なる永遠より響き來るが如し、

其威力ある宇宙の主宰の聲なるが如し、余の全身を震動せしめて曰く、「正義の正義なり」と、而して後肅然たり。

嗚呼如何すべきや、誰か此聲に抗するものあらんや、然らば倒るゝとも正義を守れとの謂か、

嗚呼余の悟れり余の神よ、正義の事業より大なるものなり、否な正義の大事業のあるなし、人世の目的の事業にして正義を守るに勝る大事業のあるなし。

の事業にあらざるなり、事業の正義に達するの途にして正義の事業の侍女(Hand maid)にあらざるなり、教會も學校も政事も殖産も正義を學び之に達する爲めの道具なり、現世に於ける事業の目的の事業其物の爲めにあらずして是に從事するものゝ之に由て得る經驗鍛錬堪忍愛心にあるなり、基督教の事業よりも精神を尊ぶものなり、その

精神の死後永遠迄存するものにして事業の現世と共に消滅するものなれば なり、支那宣教師某四十年間傳道に從事し一人の信徒を得ず、然れども喜悅以て今世を逝れり、彼の得し處なかりしや、否な、師父ザビエーの東洋に於て百萬人以上に洗禮を施したりと雖も恐くの現世より得し眞結果に於ての此無名の一宣教師に及ばざりしならん、

嗚呼事業よ事業よ幾千の僞善と卑劣手段と嫉妬と爭との汝の名に依て惹起されしや。

嗚呼然るか、然らば余の失敗せしの必しも余の罪にあらず、又神の余を見捨賜ひし證據にあらず、又余の奮勵祈禱の無益なるを示すにあらざるなり、然り若し正義が事業の目的ならば正義を發表するに於て正義を維持するに於て最も力ありし事業こそ最も成功ありし事業なり、基督教の主義より云へば正義之を成功と云ふ、正義を守る

是れ成功せしなり、正義より戻る又正義より脱する(假令少しなりとも)之を失敗と云ふ、大廈空に聳へて高く、千百の青年其内に集り隆盛を極むるの學校事業必しも成功事業にあらざるなり、其資金の性質、其設立者の精神ハ其成功不成功の標準なり、仁政之を成功なる政事と云ふ、所謂政治家の術を學び、是と和し彼と戰ひ、是に媚び彼と絶ち、如何に外面上の國威を裝ふにもせよ之れ失敗せる政治なり、義人ハ信仰に依て生くべし、兵器軍艦增加せし故に成功せりと信ずる政治家、教場美麗にして生徒多きが故に成功せりと信ずる教育家、壯宏なる教會の建築竣て成功せると信ずる牧師、帳面上洗禮を受けしもの、增加せしを以て傳道事業の成功せしと信ずる宣教師、

—是等ハ皆肉眼を以て歩むものにして信仰に依て生くるものにあらざるなり、玩弄物を玩ぶ小兒なり、木石を拜する偶像信者なり、黄

土の堆積を樂む守錢奴なり、而して基督信者にハあらざるなり、聖ア・ウガスチン曰く「大人の遊戯之を事業と云ふ」と、嗚呼余も余の事業を見る事小兒の玩弄物を見るが如くなりし、余ハ是に於て始めて基督の野の試の註解を得たり、馬太傳四章ゟ曰く、

偖イエス聖靈に導かれ惡魔に試られん爲に野に往けり、四十日四十夜食ふ事をせず後うゑたり、試むるものかれに來りて曰けるハ爾もし神の子ならバ命ぜて此石をパンと爲よ、イエス答けるハ人ハパンのみにて生るものにあらず唯神の口より出る凡の言に因ると錄されたり、是に於て惡魔彼を聖き京に携へゆき殿の頂上に立たせて曰けるは爾もし神の子ならバ己が身を下へ投よ蓋なんぢが爲に神その使等ゟ命せん彼等手にて支へ爾が足の石に觸れざるようすべしと錄されたり、イエス彼に曰けるは主

たる爾の神を試むべからずと亦錄せり、惡魔また彼を最高き山に携へゆき世界の諸國とその榮華とを見せて爾もし俯伏て我を拜せば此等を悉くあんぢに與ふべしと曰ふ、イエス彼に曰ける ハサタンよ退け主たる爾の神を拜し惟之のみ事ふべしと錄されたり、終よ惡魔かれを離れ天使たち來り事ふ、

（一節より十一節まで）

基督已に歳三十に達し内に省み外に學び終に世の大救主たるを自覺するに至れり、彼の再從兄バプテスマのヨハネも彼に此天職あるを認め神の小羊として彼を公衆に紹介せり、皇天も彼の自覺とヨハネの見解とを確かめん爲めに聖靈を鳩の如く降して彼の上よやどらせり、然れども如何にして此世を救はん乎是基督を野に往かしめし問題なり、（馬可傳一章十二節往かしめし」ハ英語の Driveth 希臘語の Ekballei

「無理よ逐ひやる」の意なり）。

彼餓たり、而后世界億千万の食足らずして饑餓に苦しむを推察せり、（醍醐天皇寒夜よ衣を脱して民の疾苦を思ひし例を參考せよ）、基督思へらく「我ハ慈善家とありて貧民を救ハん、我に土石を變じて「パン」とおすの力あり、億万の空腹立所ろよ充すべし」と、然れ共聖靈彼よ告て曰く「饑餓を救ふハ一時の慈善あり、爾の救世の事業ハ永遠にまで達すべきものなれバ億万斤の「パン」と雖も決して爲し得べきものにあらず、神の口より出づる凡ての言こそ眞正の「パン」なり、爾の天職ハ世の所謂慈善事業よあらざるなり」と。

慈善家たるの念を斷ち、彼一日聖殿の頂上ゐ登り、眼下よ万人の群集するを見し時、惡靈再び彼に耳語して曰く「爾ハ爾の思想を是等の民よ傳へんと欲す、然れども爾ハナザレの一平民にして誰も爾の才

力と眞價直とを知るものなし、故ゝ爾先づ己が身を下に投よ然らば衆人爾の技倆に驚き爾ゝ注目するに至らん、民の名望一たび爾の有に歸せば彼等を感化する掌を反すより易し」と、然れ共天よりの聲は曰く「眞理の虛喝手段を以て傳へ得べきものにあらず、民の名望に頼て彼等を教化せんとす是れ神を試み己を欺くあり、法便の救世術としての價値なきものなり」と。

基督の慈善家たらざるべし、彼の法便を使用し民の耳目を驚かして世を救ゝざるべし、然れ共彼一日高き山に登り、眼下に都府村落の散布せるを見、國土を神の樂園と爲し得べきを思ひしや、彼の胸中に浮びし救世の大方策の彼大政治家となりて社會改良を遂んとするにありき、彼思へらく、我に世界を統御するの才能あり、我一舉して羅馬人を放逐し、神の特種の撰擇にかゝる猶太人民を卒ひ世界を

化して一大共和國となし、仁を施し民を撫育し、眞正の地上の王國を建立せんと、然るに彼の良心の此高尚なる希望をも彼ゝ許さず、社會改良事業の正義堂々主義一歩を讓らざるもの、爲し遂げべきものにあらず、必ず彼に伏し是を拜し、圓滑完滿の政略を取らざるを得ず、然り我の主義にのみ頼り救世の事業を實行せんのみ、サタンよ退け、汝の巧言を以て我を擾す勿れ、我は目前の救助の爲し得ずとも、我の國人の知る所ろとならず幽陰以て世を終るとも、我の事業の事物の上に現れずと雖も、我の我の神を拜し惟之にのみ事ふべしと、基督の決心茲に於て定まり、生涯の行路彼に指示されれば、惡魔の彼を説服するに由なく、終に彼を去りたれば天使來りて彼ゝ事へたり。

基督の方向て、に定まりて彼の生涯の實にこの決定の如くなりし、

彼の衆人の饑餓を充たし得ざりしのみならず彼の死ぜんとするや彼の母さえも彼の弟子に依頼せざるを得ざるに至れり、天下の名望の一として彼に存するなく、彼の悪人として、神を瀆すものとして、刑罰に處せられたり、彼の一つの教會一つの學校をも建つる事なく、事業として見るべきもの僅よ十二三人の弟子養成のみなりき、然れども斯人こそ世界の救主よして神の獨子人類の王にあらずや、實よ然り、靈魂を有する人類にの事業に勝る事業あるなり、世の事業を以て仮々たる信者の宜しく事業上基督の失敗に注目せざるべからず。

若し基督にして慈善家たりしならば如何、ジョージ、ピーボデー(George Peabody)に勝り、スチブン、ジラード(Stephen Girard)に勝り、百千万の貧民孤兒の彼の施餓鬼に與かりしならん、然れ共ヤコブの井戸の清水を

飲むものの〻また渇かむ」と、彼が曾てサマリヤの婦人に教へし如く、彼が曾て五千人を一時に養ひし時多くの人の「パン」を得んが爲めに彼の跡よ附き從ひし如く、永遠かわく事なき水、永遠餓する事なき「パン」を彼の此世に與へ得ざりしならん、世よの貧民に衣食を給するに勝る大慈善あり、エモルソン氏曰く。

人もし我に衣食を給するも我の何時か之に充分なる報を爲ざるべからず、(直接間接に)、我受けて後之に依て富ます貧あらず、只智識上並よ道德上の補助の十全の利益なり。

加之若し基督にして慈善家たりしあらば彼の慈善の彼一代に止て萬世に至らざりしならん、視ずや彼の愛に感まされて幾多の慈善家が彼の信徒の内に起りしを、ジョンハワード、サラマーチン、エリザベスフライ、の監獄改良事業の全く彼等が基督に對する報恩心より

殺せしものにあらずや、ウサルリヤム、ウサルバフホース(William Wilberforce)並にシャフツベリー侯の慈善事業も亦然り、記者永く米國に在りて基督教國に於る慈善事業の盛なる實を東洋佛教國に於て豫想だもする能わざるを見たり、救靈上善行に價値を置かずして善行を勵ますに最も力ありしものわ基督教なり、比較上現世わ殆んど顧みるに足らざるものと見做して現世を救ひ進歩せしめしに於て最も功ありしものわ基督教なり、基督若し慈善家たりしならば彼の慈善事業わ知るべきのみ。

基督若し名望法便を利用して民を教化せしならば如何、基督教わ永遠迄人靈を救ふの潛勢力を有する宗教なあらずして、佛教の今日あるが如く早や已に衰退時代に至りしならん、法便必しも明白なる虚言にあらず、然れ共基督の「否な否な然り然り」の大教理わ法便てうものゝ功用を全く否定したり、基督信者にして高貴名望家に依て教理を傳へんとするもの、學識爵位を以て下民の尊敬を基督教に索がんとするもの、會堂の壯大を以て信徒を增加せんとするものわ皆基督の第二の誘惑に陥りしものにして、法便を利用する浅薄なる佛教信徒と大差ある事なし、基督わ法便を退けて彼の信者たるものゝ單純正直の眞價直を示せり、然るに彼の信者ゝしてその事業の速成を願ひ塔の頂上より身を投ずる愚と不敬とを學ぶものあるわ實ゝ歎ずべきにあらずや。

基督若し大政治家たりしならば如何、彼わシーザルに勝りシャーレマンに勝り、時の羅馬帝國を一統し、奴隷を廢し、税則を定め、堯舜の世アウガスタスの黄金時代に勝る樂園國を地上に建てしならん、然れども彼の「否な否な然り然り」の直道を以て實行し得べきもの

にあらず、是と和し彼と戰ひ、軍畧政策両ながら其宜しきを得ざれば到底爲し能はざりしならん、彼のピートル大帝ハ巨人なり、然れども誰か彼を以て君子仁人となすものあらんや、フレデリック大王も亦絶世の建國者なり、然れども誰か彼を以て人類の摸範と見上るものあらんや、基督ハ万世に至る迄此世を救ふべきものなれば彼ハ政治家たるべからざりしなり。

想ひ見る十八世紀の終に當て佛蘭西ハ内亂の起るや、王室ハ人民の多數と共に天主教を奉じ、加ふるにギース家の擧て之を贊助するあるを以て新教徒即ちヒューゲノー黨の苦戰止む時なく、前者に富と權力あり、後者に精神と熱心あり、此時に當てヒューゲノー黨の依て以て頼となせし唯一の人物ハナバールの大公ヘンリーなりき、彼年若くして武勇に富み、而も佛王ルイ九世の正胤にして王位を踐むべ

き充分の權利と資格とを有せり、然れ共彼プロテスタント教徒たるが故ハ此榮譽に達するを得ず、僅かに微弱なる反對黨の將となり、屢々忠實なる彼の小軍隊を以て敵の大軍を苦しめたり、彼ハ彼の黨を愛し、彼又彼の黨に愛せられたり、然るに一日彼は心中ハ思ひらく、「我此黨を卒ひて全國ハ抗し戰亂止む時なく、國民塗炭に苦しむ茲に十數年、我の忠實なる兵卒にして我の爲めに屍を戰場に曝せしもの其幾千ありしを知らず、我何ぞ永く此悲劇を見るに忍びんや、我若し一歩を讓れバ我の血統我の名望必ず我をして佛國を統一せしむハ至らん、其時こそ我ハヒューゲノー黨に信仰の自由を與へ、舊新両教徒を和合し、佛國をして强富幸福なる國民となし得べし、我何ぞ我國の爲め、我忠愛なる士卒の爲めハ忍バざらんや」と、歴史家ハ謂ふ佛國百年の計ハ實ハヘンリーのこの決斷ハなかりしと。

而してナバールの大公は此誘惑に打負けたり、彼の佛國の爲め士卒の爲めに一歩を讓り、天主教徒の請求を容れ、ヒューゲノー黨を脱し、羅馬法王に對し罪の懺悔を呈し、終に佛王として承認せらるゝに至れり、彼の讓退の彼の胸算に違ふの結果を生じ、彼の王位の強固となり、國内平穏に歸し民皆堵に就けり、彼の忠實なるヒューゲノー黨を忘れず、ナントの布令(Edict of Nantes)に依て信仰自由を天下に令し新教徒をして政治上殆ど舊教徒と異なる處なからしめたり、彼の治世の佛國の中興として見るべきものなり、殖産事業の進歩、財政の整頓、外國に對する佛國の輝榮、共にヘンリー王の事跡として文明諸國の賞讃する處となれり、然れ共彼の佛國の爲めに盡せしの惟一時の治安策ありき、彼死するやリシュリヤ、マザリンの下に佛國の光威を歐洲に輝かせしも是皆外貌の虚飾にして内に留むべからざる腐敗の釀しつゝありしなり、ルイ十四世に至て此虚勢其極に達し、ルイ十五世は黄金珠玉に包まれながら不快淫風に沈みつゝ世を終れり、ルイ十六世に至り佛國革命起り次でナポレオンの世となり其惨怛たる光景の人の皆知る所なり、ヘンリーの一時を救はんとして毒を千載に流せり、嗚呼若し彼にして基督の如く惡魔の巧言を退けしならば佛國二百年間の爭鬪流血を避けしものを、ヘンリーの佛國を愛して之を愛せざりしなり。

佛の大王ヘンリーに對して英の無冠王コロンウエルあり、彼も權力精神と相爭ふの時に生れ、身を民黨自由に委ね、英國民の全世界に對する天職を認め、十七世紀の始めに當て基督の王國を地上に來らさんとの大理想を實行せんとせり、百難起て彼の進路を妨ぐると雖も彼の確信の毫も動く事なく、終に麁粗ながらも英國をして公義と

平等とに基する共和國となすよ至れり、然れ共英國民ハ未だ悉く無冠王の大理想を有せず、彼の心靈的の政治ハ肉慾的の普通社會を歡バさず、反對終よ四方に起り彼ハ單獨白殿よ無限の神をのみ友とするよ至れり、然れ共彼の理想と信仰とハ確固として動かず、彼ハ彼の事業の永續すべからざるを知ると雖も尚は彼の最初の理想よ向て進み、内亂再起の徴あるをも顧みず、彼の勝筭全く絶へしよも關せず、終生一主義を貫徹して死せり、彼が世を去るや彼の政府ハ直よ轉覆され、彼の屍ハ發かれ、彼の名ハ賤められ、彼の事業ハ一つとして跡を留めざるが如きに至れり、世ハチャレス第二世の柔弱淫縱腐敗の世となり、バトヲル、ドライデン、クラレンドンの如き狐狸の輩寵遇を受け、ハムプデンもペーンも無冠王も曾て地上の空氣を呼吸せし事なきやの感を起さしめたり、小人ハ皆云へり清黨の事業

ハ全く失敗なりしと、然れ共無冠王死して三十年、彼の石碑に未だ青苔だも生せざる時に、スチュアート家ハ全く跡を絶つに至り、爾來眞理と自由とが地球運轉の度數と共に增進するや、無冠王の理想ハ徐々よ實成しつゝあるなり、コロムウエルありしが故に英國に十八世期の革命おかりしなり、佛王ヘンリーの讓退ハ佛國民一百年間の墮落と流血とを招き、コロムウエルありしが故よ英國民ハ他歐洲國民よ先つ百年已に健全ある憲法的自由を有せり、コロムウエルハ實に英國を愛せし人なり。

楠正成の湊川に於ける戰死ハ決して權助の縊死にあらざりしなり(福澤先生明治初年頃の批評)、南朝ハ彼の戰死よ由て再び起つべからざるよ至れり、彼の事業ハ失敗せり、然れども碧血跟化五百歲の後、德川時代の末期に至て、蒲生君平高山彦九郎の輩をして皇室の衰頽

を歎せしめ勤王の大義を天下に唱へしむるに於て最も力ありしものは嗚呼夫れ忠臣楠氏の事跡にあらずして何ぞや、ボヘミヤのハツス將よ燒殺せられんとするや大聲呼で曰く「我死する後千百のハツス起らん」と、一楠氏死して慶應明治の維新に百千の楠公起れり、楠公實よ七度人間に生れて國賊を滅せり、楠公の失敗せざりしなり。

基督の十字架上の恥辱の實に永遠に迄亘る基督教凱陣の原動力なり、基督の失敗の實に基督教の成功なりしなり。然らば余も失敗せしとて何ぞ落胆すべき、何ぞ失敗せしを感謝せざる、義の爲めよ失敗せしものの義の王國の土臺石となりしものなり、後進者成功の爲めよ貯へられたる潛勢力あり、我等の后世の爲めよ善力(Power for Good)を貯蓄しつゝあるなり、余の先祖の功に依り安逸衣食する貴族とならんよりの功を子孫に遺す殉義者とならん事を欲す。

然らば余の余の事業に失敗せしよより絶望家とあり、事業家たるの念を斷ちしや。

否な然らざるなり、余の今の眞正の事業家とありしなり、事業とは形体的のものなりとの迷信全く排除せられてより余の動くべからざる土臺の上に余の事業を建設し始めたり、余の事業の敗られしの敗るべからざる事業よ余の着手せんが爲めなり(希伯來書十二章廿七節)事業の精神の花あり果なり、精神より自然に發生せざる事業の事業にして事業にあらざるなり、爾曹まづ神の國と其義とを求めよ然らば事業も自然よ爾曹より來るべし。

第五章　貧よ迫りし時

四百四病のその中に貧程つらきものゝなし、心ゝ花であらばあれ、深山がくれのやつれ衣に誰か思を起すべき、人間萬事金の世の中、金ゝ力なり威力なり、金のみゝ我等に市民權を與ふ、金なければ學も德も人をして一市民となすを得ず、此賞讃せらるゝ十九世紀に於てゝ金なき人ゝ人にして人よあらざるなり。

我榮譽の時に友人ありしも我貧に迫りてより我ゝ無友となれり、我窮せざりし時に我に信用ありしも我が囊の空しくなると同時よ我が言ゝ信ぜられざるに至れり、われ友を訪ふも彼れ我を見るを好まず、我れ彼に援助を乞へゞ嫌惡以て我に答ふ、我と共に祈りしもの、我と共に神と國とに事へんと誓ひしもの、我を兄弟と呼びしもの、今

ゝ我の貧なるが故に我とゝ別世界の人となれり、

落ぶれて袖になみだのかゝる時

人の心の奥ぞしらるゝ

友を信ずる勿れ汝貧に迫りし迄、世の友人ゝ我等の影の如し、彼等ゝ我等日光に歩む間ゝ我等と共あれども暗所に至れゞ我等を離るゝものなり、貧より來る苦痛の中に世の友人に冷遇さるゝ、是悲歎の第一とす。

我の貧我獨り忍ぶを得ん、然れども我に依食する我の母我の妻も我が貧なるが故に貧を感せり、我ゝ我と境遇を同ふせる古人の傳を讀み以て我が貧を慰め得るとも、彼等ゝ如何よして此鬱を散するを得むや、貧より來る苦痛の中よ我父母妻子の貧困を見る是れ悲歎の第二とす。

我ゝ食を求めざるべからず、彼處に到り此處を訪ひ、業にあり就かんと欲する時、我貧なるが故ゝ彼より要求さるゝ條件多くして我の受くべき報酬は少く、我は賣人にして彼ゝ買人なれば直段を定むるゝ全く彼にあり、我不平を唱へて彼の要求を拒めば我ゝ唯我が父母妻子と共ゝ餓死するのみ、若し餓死するものゝ我一人ならば我ゝ我が意を張り我が膝を屈せざるものを、然れども今の我は一人の我ゝあらず、我を生みしものゝ爲め、我に淑德を立つるものゝ爲め、我ゝ我の尊敬せざる人にも服從せざるを得ず、貧より來る苦痛の中に食の爲めに他人に腰をかゞめざるを得ず是悲歎の第三なり。富足て德足るとゝ眞理ゝあらざるべけれども確實なる經驗あり、奢侈ゝ勿論不德なり、我富たればとて驕らざるべし、然れども滋養ある食物、清潔なる衣服ゝ自尊の精神を維持するゝ於て少なからざ

る勢力を有するものあり、我の最も嫌惡する卑陋なる思想ゝ貧と共に我が胸中を攻擊し、我をして外部の敵と戰ふと同時に內患に備ふるが爲めに常に多端ならしむ、貧より來る苦痛の中に心ゝ卑陋なる思想の湧出する是悲歎の第四なり。

貧ゝ我をして他人を羨ましめ、我を卑屈ならしむると仝時に我を無愛相なる者(Misanthropist)となすものなり、我ゝ集會の場所を忌み、我ゝ交際を避けんと欲す、我が心ゝ益々寒冷頑固となり、靄然たる君子の風、溫雅なる淑女の樣は我得んと欲して得る能ゝず、貧ゝ我を社會より放逐せしむるものなり、貧より來る苦痛の中ゝ寒固孤獨の念是悲歎の第五なり。

貧は貧を生ずるものなり、持つものにゝ加へられ持たざるものより己に持つものをも取去らる、俗に所謂貧すれば鈍するとの言は心

理學上の事實として經濟學上の原理なり、富者益々富めば貧者は愈々貧あり、貧より來る苦痛の中にこの絶望に沈む事、この無限の墮落を感ずる事是悲歎の第六あり。

嗚呼我如何にして此内外の攻擊に當らんか、貧の此身に附くものあれば此身を殺さば貧の絶ゆべし、自殺の羅馬の賢人カトー、シセロ等の許せし所、貧てふ無限無終の苦痛より遁れんが爲めにの自殺の惟一の方法ならずや、"He that dieth payeth all his debts." (死者の悉く負債を返還す)、我の社會に負ふ處、我の他人に負ふ所、我の之を返却するの目的一つとしてあるなし、我の死してのみ此借財より脱するを得るにあらずや、言を休めよ汝美食美服に飽くものよ、彼の一圓に滿たざる借錢の爲めに身を水中に投せし小婦の痴愚にして發狂せしなりと、彼婦の世に己れの貧を訴ふるの無益なるを知り、彼の純白

なる心の他人に義理を欠くに忍びず終に茲に至りしあり。

"In she plunged boldly,
No matter how coldly
The rough river ran—
Picture it—think of it
Dissolute Man!"—Thomas Hood.

然り若し宇宙の大眞理として自殺の神に對し己に對し大罪なりとの教訓の存せざりしならば貧の病を療治する爲めは我も我身に此法を施さんものを、然れども嗚呼我神よ爾の惠の我死せずして我を此苦痛より免れ得せしむ、爾に依てのみ貧者も自尊を維持し得べく、卑陋ならずして高尚なるを得るなり。

基督教は貧者を慰さむるに佛教の所謂「万物皆空」なる魔睡的の教義を以てせず、基督教の世をあきらめしめずして世に勝たしむるものあ

り、富めると貧なるとは前世の定にあらずして今世に於ける個人的の境遇なり、貧ん身体の疾病と同く之を治する能んずんば喜で忍ぶべきものなり、我の貧なる若し我の怠惰放蕩より出しものなれば我ん今より勤勉廉節を事とし投費せし富を回復すべきなり、天ん自己を助くるものを助く、如何なる放蕩人と雖も、如何なるなまけ者と雖も、一度翻りて宇宙の大道に從ひ、手足を勞し額ゑ汗せば、天ん彼をも見捨てざるなり、貧ん運命にあらざれば我等手を束て決して之に甘すべきにあらず、働けよ、働けよ、世界に存する貧の十分の九ん懶惰より來る事を記憶せよ、又正直なる仕事ん如何に下等なる仕事と雖も決して輕ずる勿れ、何をも爲さゝるん罪をなしつゝある なり(Doing nothing is doing ill)、人を欺き人を殺すのみが罪にあらざるなり、懶惰も罪なり、時を殺すも罪なり、富ん祈禱のみに依て來らず、

働くん祈るなり(Laborare est orare)、身と心とを神ゑ任せ精々以て働きて見よ、神も宇宙も汝を助け汝の勞力ん實るべかし。

然れども世にん「正義の爲めの貧」なるものなきにあらず、ロバート、サウジー曰く「一人の邪魔者の常に我身に附き纏ふあり、其名を稱して正直と云ふ」と、永久の富ん正直に由らざるべからずと雖も正直ん富に導くの捷徑にんあらざるなり、世に清貧ある事ん疑ふべからざる事實なり、或ん其心の命を重じ世俗に從んざるが故ゑ時の社會より遮斷さるゝあり、或ん直言直行我の傭主を怒らし我の業を奪ひ取らるゝあり、或ん我の思想の普通觀念と齟齬するが故に我に衣食を得るの途塞がるあり、或ん貧家ゑ生れて貧なるあり、或ん不時の商業上の失敗ゑ遭ひ、或ん天災ゑ罹りて貧ゑ陥るあり、則ち自己以外に源因する貧ありて勉勉も注意も之を取り去る能んざるの場合あり、

如斯にして貧の我身ゑ迫るあれバ我ハ勇氣を以て信仰を以て之を忍バんのみ、而して基督教ハ此耐忍を我れゑ與ふるゑ於て無上の力を有するものなり。

一、汝貧する時ゑ先づ世に貧者の多きを思ふべし、日本國民四千万人中壹ヶ年三百圓以上の収入あるものハ僅ゑ十三万人餘なり、則ち戸數百毎ゑ壹ヶ月廿五圓以上の収入ある家ハ僅ゑ壹戸半を數ふ、百軒の中九十八軒ハ壹ヶ月二十五圓以下の収入あるのみ、而して來年の計を爲し貯蓄を有するもの幾千かある、來月ゑ備ふる貯蓄を有せざる家何ぞ多きや、人類の過半數ハ軒端ゑ餌を求むる雀の如く、山野に食を探る熊の如く、今日ハ今日を以て足れりとなし、今日得しものは今日消費し、明日ハ明日ゑ任し、日ゑ日に世渡りするものなり、汝の運命ハ人類大多數の運命なり、肥馬ゑ跨る貴公子を以て普通人

間と思ふ勿れ、彼一人安閑として世を渡り綺羅を被り美味ゑ飽ん爲めにハ數千の貧人は汗滴勞働しつゝあるあり、貧ハ常ゑして富ハ稀なり、汝ハ普通の人ゑして彼貴公子ハ例外の人なり、一人ゑして忍び能ハざるの困難も万人共に之を忍べバ忍び易し、汝ハ人類の大多數と共に饑餓を感じつゝあるあり。

二、古代の英雄にして智に於ても德に於ても遙かに汝に勝りしものが汝の貧ゑ勝る貧苦を受けし事を思へ、哲學上神學上信仰上功績上人類の頭と承認せらるゝ使徒保羅は四十年間無私の勞働の後に彼の所有ゑ屬するものとてハ外衣一枚と古書數卷とのみなりしを思へ(提摩太後書四章十三節)、古哲ソクラトスハ日々に二斤のパンと雅典城の背后に湧出する清水とを以て滿足したりしを思へ、「之を文天祥の土窖に比すれバ我が舍ハ則ち玉堂金屋あり、塵垢の爪に盈つる蟻虱の

腐を侵すも未だ我正氣よ敵するよ足らず」と勇みつゝ、幽虚の中に沈吟せし藤田東湖を思へ、「道義肝を貫き、忠義骨髄に填ち、直に須く死生の間に談笑すべし」と悠然として饑餓に對せし蘇軾を思へ、エレミヤを思へ、ダニエルを思へ、和漢洋の歴史何れなりとも汝の意に任せて渉獵し見よ、貧苦よ於ける汝の友人の多き事蒼天の星の數の如し。

三、耶蘇基督の貧を思へ、彼の貧家に生れ、口碑の傳ふる所に依れば彼の十八才にして父を失ひ、爾后死よ至る迄大工職を業とし父の一家を支へしとなり、狐の穴あり空の鳥の巣あり左れど人の子の枕する處だもなしとの基督地上の生涯なりき、僕のその主人に優る能ずや、汝の貧困基督の貧困よ勝るや、彼は貧者の友なりし、貧しきものゝ幸なり(路加六章廿節)との非常の言の彼の口より出でしなり、貧

ならざれゞ基督を悟り難し、

"Christ was hungry, Christ was poor,
He will feed me from his store."—
Luther's Song.

四、富必しも富ならざるを知れ、富との心の滿足を云ふなり、百万圓の慾を有する人にの五拾万圓の富の貧なり、拾圓の慾を有する人にの二十圓の富なり、富むに二途あり、富を増すよあり、慾を減ずるにあり、汝今の富を増す能ずず、然らば汝の慾を減せよ、カーライル謂へるあり曰く、「單數も零にて除すれば無限なり(0÷8)故に汝の慾心を引下げて世界の王となれ」と、余の五拾万弗の富を有する貴婦人が貧を懼れて縊死せるを聞けり、金滿家の内幕の必しも平和と喜悦とにのあらざるなり、神の子の如き義俠、天使の如き淑徳の寧ろ貧家に多くして富家に尠し、我等の貧にして巨人たるを得るあり、

神が汝に與へし賞てう好機械を利用して汝の德を高め汝の家を清めよ、快樂なる「ホーム」を造るに風琴の備附下婢下男の雇入を要せず、若し富を得るの目的ハ快樂にありとならバ快樂ハ富なしにも得らるるなり、"My mind to me a kingdom is."(心ぞ我の王國なり)、我ハ貧にして富む事を得るなり。

五、汝今衣食を得るに困しむ、然らバ汝も空の鳥、野の百合花の如くなりて汝の運命を天に任せよ、

是故に我なんぢらに告ん、生命の爲めに何を食ひ何を飲みまた身體の爲めよ何を衣んと憂慮ふまと勿れ、生命は糧より優り身體ハ衣よりも優れる者ならずや、なんぢら天空の鳥を見よ稼ことなく穡ことを爲さず倉に蓄ふることなし然るに爾曹の天の父ハ之を養ひ賜へり、爾曹之れよりも大いよ勝るゝものならずや、

爾曹のうち誰か能くおもひ煩ひて其生命を寸陰も延べ得んや、また何故に衣のことを思ひわづらふや、野の百合花ハ如何にして長つかを思へ、勞めず紡がざる也、われ爾曹に告んソロモンの榮華の極の時だよも其裝ひこの花の一よ及バざりき、神ハ今日野よ在て明日爐よ投入れらるゝ卿をも如此よそハせ給へバ況て爾等をや嗚呼信仰うすき者よ、然バ何を食ひ何を飲みなにを衣んと思ひわづらう勿れ、此みな異邦人の求むる者あり、爾曹の天の父ハ凡て此等のもの、必需とを知りたまへり、爾曹先づ神の國と其義とを求めよ然らバ此等のものハ皆あんぢらに加へらるべし、是故に明日の事を憂慮ふなかれ、明日ハ明日の事を思ひわづらへ一日の苦勞ハ一日よて足れり、

(馬太傳六章從廿五節至卅四節)

或佛教家此章句を評して曰く基督教の人を怠惰よおさしむるものなりと、然り基督教は多くの佛教徒の今日爲すが如く濟世を怠りつゝ自己の蓄財よ汲々たるを奬勵せざるなり、基督教の雀の朝より夕迄忙がしきが如く人をして忙がしからしむるものなり、基督教の富の爲めに人の思慮するを許さず、勿論世に稱する基督信徒必しも皆空の鳥野の百合花の如くよあらず、或者の蟻の如く取ても取ても溜めつゝあるなり、或者の狐の如く取りしものの皆隠し置き、何時用ふるとも知らず、唯取るを以て快樂となしつゝあるなり、然れども是基督教にのあらざるなり、汝若し温屋玻璃の内にナサレの耶蘇の弟子ありと聞とも汝の心を傷ましむる勿れ。

哲學者カント云へるあり曰く「宇宙の法則を以て汝の言行とせよ」と空の鳥野の百合花の此法則よ從ひ居れば之何を食ひ何を飲み何を衣

んとて思ひわづらのざるなり、社會の生存競爭のみを以て維持するものよあらざるなり、人の食ふ爲めよのみ此世よ來りしよあらざるなり、此地球の神の職工場なれば働くものにの衣食あるの當然なり、職工場の職人の衣食の事のみを思ひ煩ひてその職を盡し得ざるなり、我も此宇宙よ生を有し宇宙の一小部分なれば我若し天與の位置を守らば宇宙は我を養ふなり、エモルソン曰く

"If the single man plant himself indomitably on his instincts, and there abide, the huge world will come round to him." ——The American Scholar.

衣食の爲めに思考の殆ど全量を消費する十九世紀の社會も人も決して基督の理想よあらざるなり。

六、故よ汝餓死せんと心配する勿れ、餓死の恐怖の人生快樂の大部分を消滅しつゝあるなり、ナポレオン大帝云へるあり「食ひ過ぎて死す

るものゝ食足らずして死するものよりも多し」と、人口稠密ある我國に於てすら餓死するものとてゝ實よ寥々たるよあらずや、天の人を惠む實よ大なり、毎年八百万石餘の米穀ゝ無益有害なる酒類と變化さるゝにも關せず、勞力の大部分は宴會とやら裝飾とやら小兒遊戯的の事物に消費せらるゝに關せず、人類の食糧ゝ尚は足り過ぎて毎年夥多の胃病患者を出すよあらずや、世に最も有難きものは餓死なり、明治廿二年の統計表に依れば全國に於て途上發病又ゝ餓死よて死せしものゝ僅々千四百七十三人あり(消化器病にて死せしものゝ二十萬五千餘人あり)、汝眞理の神を拜しその命令に從わんと勤むるものが如何でか餓死し得べけんや、

ダビデ歌て曰く、

われむかし年わかくして今おいたれど義者のすてられ或はその裔の糧てひあるくを見しことなし　(詩篇三十七の二十五)

余ゝ善人の貧するを聞けり然れ共未だ神を恐れしものゝ餓死せしを聞かず、餓死するの恐怖を捨てよ汝信仰薄きものよ。

七、汝心を靜めて良き日の來るを待て、變り易きゝ世の習あり、而して幸福なるものよ取ては千代も八千代も變らぬ世てそ望ましけれども不幸なるものよ取てゝ變り行く世の中程樂しきものゝあらざるあり、我の貧は永久迄續くべきにあらず、世の風潮の變り來て「我等の時代」とならん時ゝ我の飢餓より脫する時なり、神は此世の富よ勝る心の富を我に賜ふが故に我終生貧なるとも忍び得べし、地ゝ善人の爲めに造られしものなれば我善と義とを慕ふ事切なれば神ゝ我に地の善き物をも賜ふべし、我の今日貧あるゝ我の心の爲めにして我が世の物に優りて神と神の眞理とを愛せんが爲めなり、信仰の鍛錬已に足り、肉慾已よ減磨せられ、我已よ富貴よ負ける慮あきよ至て神

の世の寶を以て我に授け玉ふあるべし、世よ最も憫察すべきものは富を有して之を使用し能はざる人あり、富の神聖なり故よ神聖なる人のみ之を使用し得る也、我貧して「人不惟以餅生」を知れり、若し富我よ來るあれば我の富を以て得る能はざる寶を得ん爲めよ之を使用すべし、我の貧ある是れ我の富んとするの前徴にあらずや。

八、我よ世の知らざる食物あり(約翰傳四章三十二節)、我よ永遠かわく事なき水あり(仝十四節)、人靈の榮譽として最高きもの即ち神ならでの彼の滿足し得べからざるあり(ビクトル、ヒューゴの語)、而して我の此最上の食と飲物とを有す、我實よ足れるものにあらずや、如何なる珍味と雖も純白なる良心よ勝るものあらんや、罪より免されし安心、神を友と持ちし快樂、永遠の希望、聖徒の交り―、我の世の富めるものよ問へん、君の錦衣君の壯屋君の膳の物君の「ホーム」(若し「ホーム」あるものを君も有するならば)の此高尚無害健全なる快樂を君よ與へるや否や、醫師の云へずや快樂を以て食すれば麁食も躰を養ふべけれ共心痛の消化を害し滋養品も其功を奏する少しと、眞理の心の食物なるのみならず亦身躰の食物あり、我の滋養の天より來るあり、浩然の氣の誠に實に不死の藥あり、貧しきものよ悅べ天國の汝のものなれば。

第六章　不治の病よ罹りし時

身躰髮膚我之を父母よ受け、鉄石の心臟鋼鉄の筋骨我ハ神の像と精とを以て世よ出でたり、我よアダムの無死の躰格なかりしにもせよ、我にアポロの完全均齊なる身躰なかりしよもせよ、我の父母より授かりし躰ハ今日我の有する躰よあらざりしなり、我よ永生よまで至るべきの肉躰なかりしも、我能く百年の勞働と快樂とよ堪ゆる靈の器を有せり、仰でハ千仞の谷を攀登るべし、伏してハ隻手を以て蒼海を渡るべし、鷲の如きの視力能く天涯を洞察し得べし、虎の如きの聽神經能く小枝を拂ふ軟風を判別し得べし、我の胃ハ消化し能ハざるの食物あるなく、我の肺ハ万丈の頂巔にあるも我よ疲勞を感せしめず、我醒むる時ハ英氣我に溢れて快を絶呼せしめ、我の床に就

くや熟睡直よ來て無感覺なる事丸太の如し、山を拔くの力、世を蓋ふの氣、我之を有せり、而して今之を有せざるなり。

此快樂世界も病める我に取りてハ一の用あるなし、存在ハ苦痛の種にして我の死を望む勞働人夫の夜の來るを待つが如し、梅花ハ香を放つも我よ益なし、鶯は戀歌を奏するも我よ感なし、身を立て道を行ひ名を後世に遺すの希望は今ハ全く我にあるなく、心を盡し力を盡し國と人とを救ふの快樂も今ハ我の有よ歸せず、詩人ゲーテ曰く Unnutz sein ist Todt sein（不用よあるハ死せるなり）と、我いま世に不用なるのみならず我の存在ハ反つて世を惱ますものなり、我若し他を救ひ得ずハ我ハ他人を煩らはさいるべし、嗚呼惠ある神よ、一日も早く我をして今世を終らしめよ、我今爾より望む他にあるなし、死ハ我よ取りてハ最上の賜物なり、

如何なれバ艱難にをる者に光を賜ひ、
心苦む者に生命を賜ひしや、
斯かるものは死を望むなれども來らず、
これをもとむるハ藏れたる寳を堀るよりも甚はだし、
もし墳墓を尋ねて獲バ
大ひに喜び樂しむなり、
其道かくれ神に取籠られをる人に
如何なれば明光を賜ふや、

顧れバ過にし年の我の生涯、我の失敗、我之を思へバ後悔殆んど堪ゆべからざるものあり、嗚呼夜の來らざりし前に我ハ我の仕事を終へざりしを悔ゆ、我の過去ハ砂漠なり、無益に浪費せし年月、思慮なく放棄せし機會、犯せし罪、爲さゞりし善、――我の痛みハ肉躰の

みに止まらざるなり。

シオンの戰ハ酣なるに我ハ用なき兵なれバ獨り內に坐して汗馬の東西に走るを見、矢叫の聲、大鼓の音をたゞ遠方に聞くに過ぎず、我ハ世に立つの望み絕へたり、又未來に持ち行くべき善行なし、神ハ如斯不用人間を要し賜ハず、嗚呼實につまらなき一生にあらずや。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

我絕望に沈まんとする時、永遠の希望ハ又我を力づくるあり、基督ハ希望の無盡藏なるが如し、彼に依てのみ枯木も再び芽を出すべく、砂漠も花を生じ得べし、預言者エゼキエルの見し枯れたる骨の蘇生せしは我等の目擊する事實なり(以西結第三十七章)

不治の病に罹りし時の失望は二個なり、卽ち我再び快復する能ハざるべし、我ハ今ハ癈人なれば世に用なきものとなれりと、

一、汝如何ぞして汝の病の不治あるを知るや、名醫已に汝ぞ不治の宣告を申渡したるが故に汝の不治と決せしか、然ども汝の不治と稱せし病の全癒せし例の多くあるを知らざる也、汝の十九世紀の醫學の人間と謂ふ奇蹟的の小天地を悉く究め盡せしものと思ふや、近來醫學の進歩の實に驚くべきなり、然れども醫者は造物主ぞあらざるなり、殊に此診斷麁陋の時代に當て我等の容易ぞ失望すべきぞあらざるなり、生氣の天地ぞ充ち滿て常に腐敗と分解とを留めつゝあるなり、醫師悉く我を捨てなば我の醫師の醫師なる天地の造主ぞ行かん、彼に人智の及ばざる治療法と藥品あるべし、生命の彼より來るものなれば我の眞ぞ生命の泉ぞ至て飲まん、醫學の進歩と同時ぞ人類が醫學を專信するに至り、醫學の及ばざるを以て人力も神力も

及ばざる處と見做すに至りしの實に人類の大損耗と云わざるべからず、我等勿論舊記に載する奇蹟的の治療今日尚存するとの信せず、屋根より落て骨を挫きし時醫師に行かずして祈禱ぞ賴るの愚なり、不信仰なり、神の熱病を癒さんが爲めぞ「キナイン」劑を我等に與へ賜へり、人これあるを知て之を用ひざるの罪あり、局部切斷の時ぞ當り「コロヽホルム」劑の天賜の魔睡劑なれば感謝して受くべきあり、然れども我等病める時ぞ悉く醫者と藥品とに賴るの我等の爲す可らざる事なり、我等病重くして庸醫を去て名醫に行くが如く、名醫も尚我等を治する能ざる時の神なる最上の醫師に至る也、庸醫が我の病の不治ありと診斷する時の我の絶望に沈べきや、否然らず、名醫の診斷の庸醫の診斷の全く誤謬なるを示す事あるが如く、全能の神より見賜ふ時の不治と稱する汝の病も又治し難の病にあらざるべし。

世に信仰治療法あるものあり、即ち醫藥を用ひず全く衛生と祈禱とに由り病を治する法を云ふ、我等の或る一派の信仰治療者の云ふが如く、醫師の惡鬼の使者にして藥品の惡魔の供する毒物なりと云ふ、然れども信仰の難病治療法として莫大の實功ある事を疑はず、勿論我等の稱する信仰治療法なるものかの偶像崇拜者が醫藥を輕じて神佛に祈願し、或の靈水を飲むの類を云ふにあらず、信仰治療法の身躰を自然の造主とその法則とに任し、怡然として心に安じ宇宙に存在する靈氣をして我の身體を平常躰に復さしむるにあり、是迷信にあらずして學術的の眞理なり、殊に醫師の稱する不治の病に於ての唯此治療の賴るべきあるのみ、我の我が病を治せんが爲めに法便として信仰せず、是眞正の信仰にあらざれば、如斯の信仰治療法の無益なり、然れども我信せざるを得ざれば信ずるなり、

見よ下等動物の傷痍を癒すに於て自然法の速かにして實功多きを、清淨なる空氣に勝る强壯劑のあるなく、水晶の如き清水に勝る下熱劑のあるなし、殊に平安なる精神は最上の回復劑なるを知るべし、博識に依る信仰治療法の病體を試驗物視する治療法に優る數等なるを知れ。

二、汝癈人となりたればとて絶望せんとす、嗚呼然らば汝の宗教も夥多の基督信徒並に異教信徒の宗教と同玄く事業教なり、汝も未だ人類の大多數と共に事業を以て汝の最大目的となすものなり、事業の人間の最大快樂なり、然れども此快樂を得る能はずとて落胆失望に沈むの汝の未だ事業は優る快樂あるを知ざれば也、基督教の他の宗教に勝りて事業を奬勵すると雖も基督教の目的の事業にあらざるなり、基督の汝が大事業家たらんが爲めは十字架上は汝の爲めに生命

を捨てざりしなり、基督の目的い汝の心靈を救いんとするにあり、若し世の快樂が汝を神に歸らしむるの妨害となるなれば神い此快樂を汝より取り去り賜ふべし、神い汝の身躰と事業とよ勝りて汝の靈魂を愛し賜ふあり、汝の事業若し汝の心を神より遠ざくるあれば神い此事業てふ誘惑を汝より取除け賜ふなり、人い偶像を崇拜するのみあらず亦自己の事業をも崇拜するものなり、

あんぢい祭物をこのみ賜いず、

若し然らずば我これをさゝげん、

なんぢまた燔祭をも悅びたまいず、

神のもとめたまふ祭物いくだけたる靈魂なり、

神よなんぢい碎けたる悔しこゝろを藐しめたまふまじ。

事業とい我等が神にさゝぐる感謝のさゝげ物なり、然れども神い事業よ勝るさゝげ物を我等より要し賜ふあり、即ち碎けたる心、小兒の如き心、有の儘の心なり、汝今事業を神にさゝぐる能はず、故よ汝の心をさゝげよ、神の汝を病ましむる多分此爲めならん、汝いべ

ダニヤのヤルダの心を以て基督に事へんと欲し供給のこと多しといりみだれ(路加傳十章四十節)たるあるべし、故よ神い汝にヤリヤの心を與へんが爲めに汝をして働らき得ざらしめたり、

手にものもたで十字架にすがる、

とい汝の常に歌ひし處よして、其細奥なる意義を知らんが爲め汝い今働く事能いざるものとなれり。

我のこの世につかわされしい、

わが意を世にはる爲めあらで、

神の惠をうけんため、

そのみむねをゞとげん爲めあり。

なみだの谷や笑の園、
かなしみゝ來んよろこびと、
よろこび受けんふたつとも、
神のみこゝろならゞこそ。

勇者のたけき力をも、
敎師のもゆる雄辯も、
われ望まぬにあらねども、
みむねのまゝよあるよはしかじ。

弱き此身はいかにして、
そのつとめをゞはつべきや、
われゝ知らねど神はしる、
神に頼る身ゝ無益ならねを。

小なるつとめ小ならず、
よを蓋ふとても大からず、
小ゝわが意をなすにあり、
大ゝみむねよるよあり。

わが手を取れよわが神よ、
我行くみちを導けよ、

われの目的の御意をば、
爲すか忍ぶにあるなれば。
汝手足を勞するを得ず故に世よ爲す事なしと言ふや、汝高壇よ立て
説教し得ず故に福音を他に傳ふるを得ずと言ふや、汝筆を採て汝の
意見を發表するを得ず故に汝世を感化するの力を有せずと言ふや、
汝病床にあるが故に汝の此世に存するは無用なりと言ふや、嗚呼、
然らば汝の戰場に出でざる兵卒の無用なりと言ふなり、山奥よ咲く
蘭の無用なりと言ふなり、海底よ生茂る珊瑚の無用なりと言ふなり、
渠の岩間に咲く蓮馨花の人よ見ざるがゆゑよ彼女の紅衣を以て裝
ふざるか、年々歳々人知れずして香を砂漠の風よ加へ、色を無覺の
岩石に呈する花何ぞ多きや、神の人目の達せざる病床の中に神よ依
て靈化されたる天使の形を隱し置き賜ふなり、靜寂なる汝の温顔に

忍耐より來る汝の微笑の千百の説教よ勝て力あるものなり、凹みた
る汝の眼中よ浮ぶ推察の涙一滴の萬人の同情よ勝る刺激なり、痩尖
りたる汝の手を以て握手さる、時の天使の愛を我等が感受する時な
り、我未だ我が眼を以て天使を見し事なし、然れども我の愛せしも
のが病床よありし時大理石の如き容貌、鈴虫の音の如き聲、朝露の
如き涙――彼若し天使よあらざれば何を以て天使を描かんや、我の
如斯ものが終生病より起つ能はずして我が傍よあるとも、決して苦
痛を感せざるべし、彼の日々我の慰藉なり、我を淸め、我を高め、
我をして天使が我を守るの感情あらしむるものなり、汝若し天使を
拜せんとならば、行て病に臥する淑德の婦人を見よ、彼の今世に於
て已に靈化して天使となりしものなり。
汝又快樂を有せずと言ふ勿れ、汝の愛するもの汝と共にあり、是大

ある快樂あらずや、汝の軟弱なると忍耐なるとに、汝の强壯なる時に勝りて汝を愛らじきものとなせり、愛せらるゝは今汝の特權なり、汝力なきものとして愛せられよ、愛せらるゝを拒むに汝他を惱ますなり、汝の愛するものに汝の愛せられんことを望むなり、世に病者の存する理由に世に愛せらるゝものゝあらんが爲めならん、我等弱きものを愛して自己の高尚なるを感ずるものなり、我に愛せらるゝよりも愛する事を欲す、汝我の爲めに我に愛せられよ、而して我の汝を愛するに依て汝より受くる喜悅と感謝とを以て汝の快樂とせよ。汝若し尚は普通の感覺を有するあれば無限の快樂未だ汝と共に存するなり、山野はさまよひ自然と交通して自然の神と交はるに今汝の能はざる所、淑女巨人と一堂に集ひ思想を交換し事業を畫するに今汝の及ばざる所、然れども若し汝はして四十八文字を解するを得ば、

聖書ある世界文學の汝と共にあるなり、以て汝を勵し汝を泣しむべし、以て汝の爲めに戀歌を供し(ソロモンの雅歌)汝の爲めに軍談を述ぶ可し(約書亞記師士記)、貞操美談あり(路得記)、慷慨歌あり(耶利米亞記)、汝の渾ての感情は訴へ喜怒哀樂の情かわる〳〵起り汝をして少しも倦怠おからしむ、汝聖書を樂讀せよ。

然れども若し讀書に汝の堪ゆる所にあらざれば、他の快樂尚は汝の爲めに備へらる、あり、即ち心を靜めて神の攝理を思ひ見よ、神に人を造り彼に罪を犯すの自由を與へて又彼を救ふの術を設けられたり、救濟の目的として此世界と汝の一生とを考へ見よ、如何なる芝居の脚本か之に勝るの悲劇歌劇を載するあるや、攝理の戲曲(Romance of Providence)を讀むものに保羅と共に絶呼せざるを得ず、

あゝ、神の智と識の富は深いかな、其法度に測り難く、其踪跡は

索ね難し。孰か主の心を知りし、孰か彼と共に議することを爲せしや。孰か先づかれに施へて其報を受んや。そゝ萬物は彼より出、かれに倚り、かれに歸れべなり。願くは世々榮神にあれ。アーメン。

（羅馬書十一章三十三節より卅六節迄）

僧アンソニー曾て書を盲人某に送て曰く、

君肉眼欠乏の故を以て君の心を苦しむる勿れ、之れ蠅も蚊も有するものなれべあり。たゞ喜べよ、君は天使の有する眼を有するが故に神を覩るを得、神の光を受くべけれべなり。

動物的の汝の病めり、然れども天使的の汝の健全なるを得るなり、汝動物的の快樂を去り天使的の快樂を取れ。

亦病むものゝ汝一人ならざるを知れ、一秒時間に一人づゝ、人類の呼吸を引き取りつゝあるを思へ、一ヶ年に八十万人宛日本人の墓に葬らるゝを知れ、全國にある四万人以上の醫師の平均一日五人以上の患者を診察しつゝあるを覺へよ、しかのみならず少しも病を感せざるの人としての千人中一人もあるなきを知れ、實に人類全躰の病みつゝあるなり、人類のアダムの罪に由て死刑を宣告されしものなり、（如何なる神學上の學説より論ずるも）、而して第二のアダムより靈の賜物を得しものゝみ眞正の生命を有するものなり、汝の人類全体と共に病みつゝあるあり、汝の苦痛に依て心靈を有する世界人民十六億万人の苦痛を想ひ見よ。

汝を哺育せし汝の母も汝の如き苦痛を忍んで眠れり、汝より妙齡なる汝の妹も能くその兩親の言を聞き分けてつぶやく事なくして眼を閉ぢたり、汝獨り忍び得ざるの理あらんや、神のその獨子をして人間の受くべき最大苦痛を感せしめ玉へり、神は愛する程その子を苦

しめ賜ふが如し、汝の苦しめらるゝは汝神に愛せらるゝの証なり、忍びて試誘を受る者ゝ福なり、蓋ゝて、ろみを經て善とせらるゝ時ゝ生命の冕を受くべけれゞなり、この冕ゝ主己を愛するものに約束し給ひし所のもの也(雅各書一章十二節)。

來ちんとする未來の觀念ゝ汝を慰むるや否やを知らず、今之を汝に說く反て汝を傷ましむるを恐る、然れども世界の大英雄大聖人の希望と慰ゝ多くゝ未來存在の信仰にありき、ソクヲトスゝ靈魂不滅に就て論究しつゝ、死せり、老牧師ロビンソン醫師より危急の報を聞くや彼の友人に告て曰く「死とゝ斯く平易なるものなるや」と、スウヰーデンボルク將ゝ死せんとするや友人彼の心中の樣を問ふ、彼答て曰く「幼時老母の家を訪はんとするの喜悅あり」と、ピクトルヒューゴゝ佛國の詩人ゝして小說家なり、彼の著述ゝ歐洲を震動せしめ彼の筆

誅ゝ耀りし高慢なる宗敎家と政事家ゝ彼を虛无黨と稱し無神論者と見做したり、彼れ歲八十ゝして尙ゝ壯年の希望あり、一日彼の未來存在ゝ關する信仰を表白して曰く、

余ゝ余ゝ未來生命の存するを感ず、余ゝ切り倒されたる林の木の如し、新鮮なる萌芽ゝ愈々强く愈々活潑に斷株より發生するを見る、余ゝ天上に向て登りつゝあるを知る、日光ゝ余の頭上を輝せり、地ゝ尙ゝ其養汁を以て余を養へども、天ゝ余の未だ識らざる世界(天國)の光線を以て余を輝らせり、人ゝ言ふ靈魂とゝ存せざるものゝゝして唯躰力の結果ゝりと、然らば何故ゝ余の躰力の衰ふると同時ゝ余の靈魂の益々光澤を加ふるや、嚴冬余の頭上に宿るに余の心ゝ永久の春の如し。

我生涯の終りに近づくに及んで他界の美音益々明瞭ゝ余の耳ゝ達するを覺ゆ、其聲驚くべくして又單純あり、雅歌の如くゝして歴史樣の事實あり、余ゝ半百年間散文ゝ詩文に歴史に哲學ゝ戯、曲ゝ落首に余の思想を發表したり、而して尚ほ余の心に存する千分の一だも言ひ盡さゞりしを知る、余ゝ墓に入る時余は一日の業を終へたりと言ふと雖ども、余の一生を終へたりと言ふ能ゝず、余の仕事ゝ明朝又再び始まらんとす、墓とゝ道路の行詰りにあらずして、他界に達する通り道なり、曉に至る昧爽なり。

余ゝ此世に存する間ゝ働くなり、此世ゝ余の本國あれどもあり、余の事業ゝ始めかけたり、余の築かんとする塔ゝ漸く土臺石の据附を終へたり、其竣工ゝ永久の仕事なり、余の長久を渴望するゝ余の永久の生を有する証あり。

と此人にして此言あり、靈魂不滅ゝ基督教の教義のみにあらざるなり。

メソヂスト派の始祖ジョン、ウエスレー死するの前日、彼れ友人に向ひ數回重復して曰く、「何よりも善き事ゝ神我等と共ゝ在す事なり」と、神ゝ万物の靈たる人間の有するもの、中に最も善なる最も貴きものあり、神ゝ財産に勝り、人躰の健康に勝り、妻子に勝りたる我等の所有物なり、富ゝ盗まるゝの懼と涙費さるゝの心配あり、國も教會も友人も我を捨てん、事業ゝ我をたかぶらしめ、此肉躰も我失はざるを得ず、然れども永遠より永遠ゝ至る迄我の所有し得べきものゝ神なり、人靈の價値ゝ最も高き神より以下のものを以て滿足し能ゝざるにあり、而して

その或ゝ死、或は生、或ゝ天使、あるひゝ執政、あるひゝ有能、

あるひゝ今ある者、あるひゝ後あらん者、或ゝ高き或ゝ深き、また他の受造者ゝ我儕を我主イエスキリストに頼れる神の愛より絶らすこと能ゝざる者なるを我ゝ信せり。

（羅馬書第八章三十八、卅九節）

汝神を有す又何をか要せん。

不治の病怖るゝに足らず、快復の望尚は存するあり、之に耐ゆるの慰と快樂あり、生命に勝る寶と希望とを汝の有するあり、又病中の天職あるなり、汝ゝ絶望すべきにあらざるなり。

明治廿六年二月廿四日印刷
明治廿六年二月廿五日出版

著者　内村鑑三　大阪府西成郡曽根崎村番外百三十五番屋敷

發行者　福永文之助　東京市京橋區出雲町一番地

印刷者　矢部外次郎　大阪市西區新町通四丁目百六番屋敷

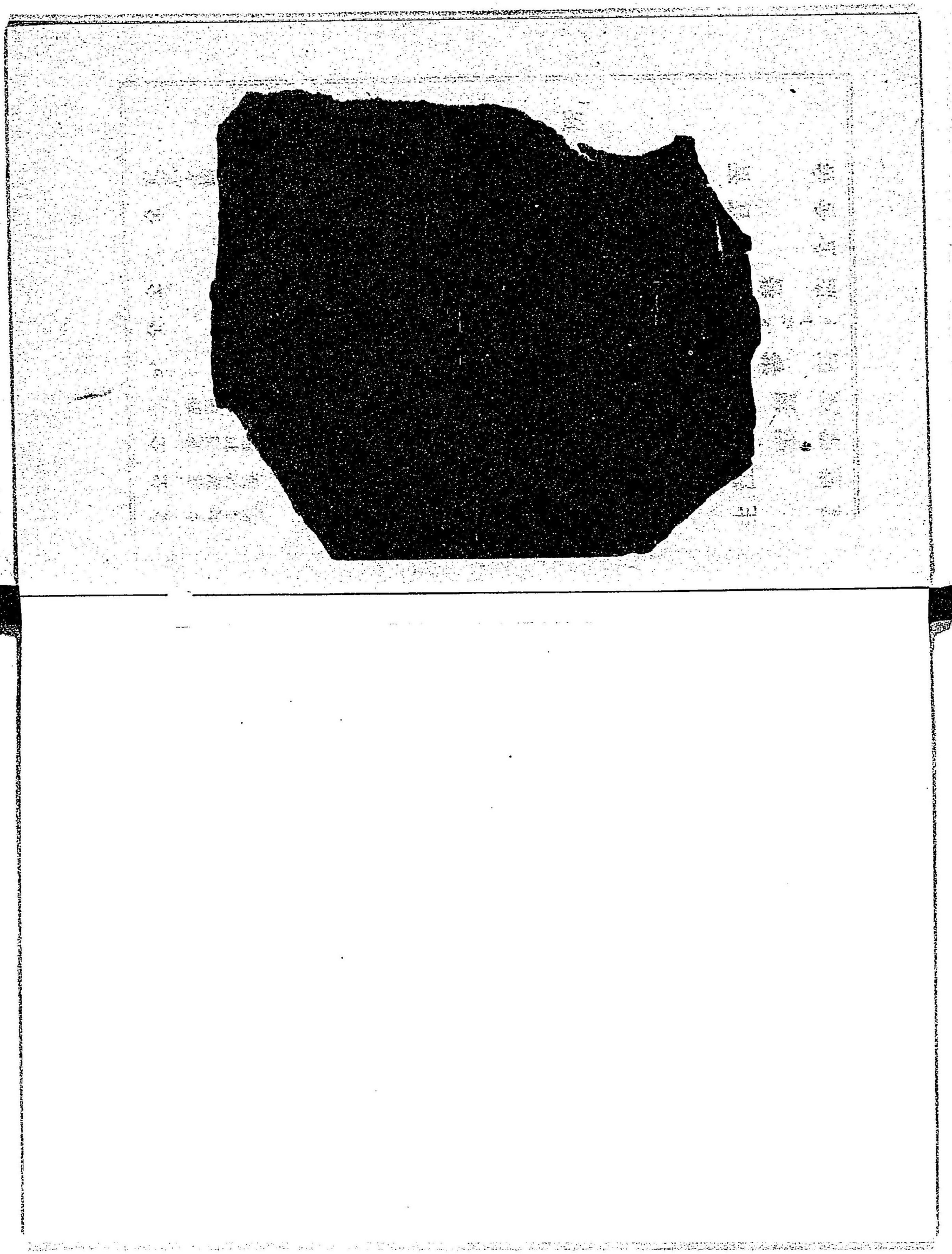
發賣所　警醒社　東京市京橋區出雲町

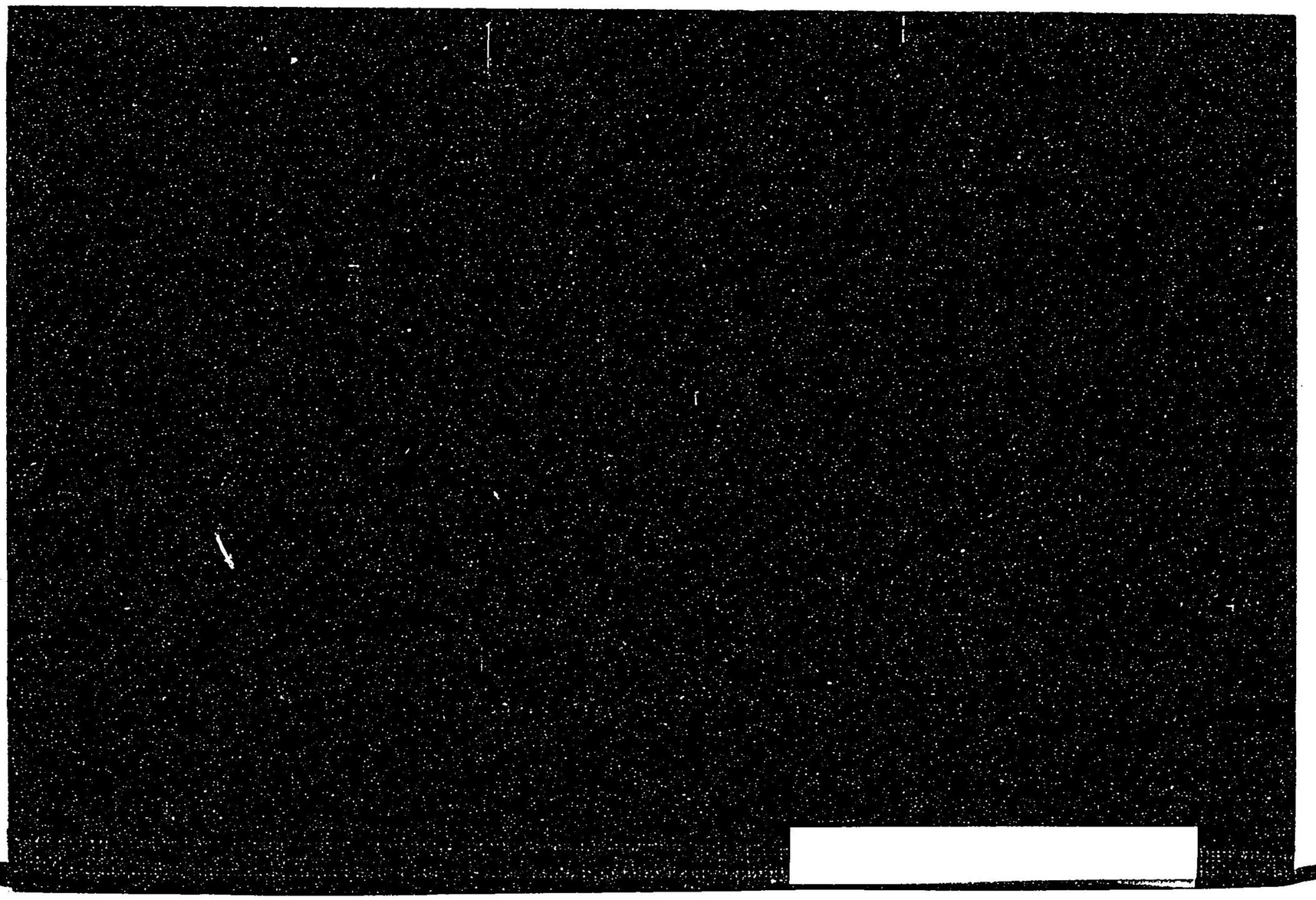
大賣捌所　福音社　大阪市西區土佐堀三丁目

版權登錄
版權所有

各府縣賣捌所

東京々橋區	十字屋	横濱地藏阪	福音舍
仝	聖公會書類會社	函館相生町	福音舍
仝	小林新兵衛	神戸元町	福音舍
仝	東海堂	仙台新傳馬町	大塚書店
仝	メソヂスト出版社	京都今出川	クリスチヤンボード
仝	一二三書店	大阪京町堀	吉東書店
仝	神田區	誠屋書店	仝 老松町	岡本光塩堂
仝	芝田村町	鈴木書店	仝 新町	矢部晴雲堂
仝	赤阪溜池	十愛社	上州前橋	文江堂
仝	下六番町	文[illegible]社	信州福山	便生堂





特18
162

基督信徒の慰

国立国会図書館

020544-000-1

特18-162

基督信徒の慰

内村 鑑三／著

M26

ABI-0357